
ライトの旅 ~気球に乗って~

守り人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ライトの旅 ～気球に乗つて～

【Zコード】

Z2423

【作者名】

守り人

【あらすじ】

チートなピチューによる旅の目的あやふや、キャラ設定めちゃくちゃの文章がむちゃくちゃなほのぼのラブストーリー（嘘）です！

読んだ人は感想を書いて下さい、むちゃくちゃ励みになります…！おかしな所は指摘して下さい！（b^ー。）

題名の氣球に乗つては途中で意味が無くなってしまいます（汗）

気球に乗りついでー（前書き）

一話は300文字程度と少ないですが読んでいいで欲しいです！

気球に乗りつ!

ジリリリリリリ！

目覚まし時計が鳴り響く

この物語の主人公ライトは飛び起きた

「やつべーーー！遅刻だ！ん？待てよ、学校は昨日卒業したんだ…」つ

大声を出しつづけている時点では、どうせやるなら良しとするべきだ。

早速、荷物をまとめる、つと言つても肩掛けのカバンに少しの量を入れるだけなので、一分もかからなかつた。そしてお気に入りの青色のゴーグル（決してプールに入る時に使うものではありません）をつけて青色のスカーフをマントのように着けて完了だ！

足音を忍ばせて家を出る

書き忘れたがライトはピチューだ、少し乱暴な言葉使いなのはスル
ーしてもらいたい

「後は家の裏の茂みに隠しておいた小さな気球を出すだけか」

茂みの中をじろじろと探つてライトはお田端の物を見つけた

「ライターでガスの部分に点火して」と……よし……しゃうぱつ！

ライトを乗せた気球は風の吹くまま流れていった。

氣球に乗りついで。（後書き）

ライト「つ～え～…」れで終わつ？

そつだよ…

ライト「え～」

まあ読者の皆さんに挨拶だけでもしどいたら？

ライト「そつするよ…

ボクはペチューナのライト…宜しく…。」

「ライト「次回をお楽しみに…。」

なんだ?此処は?(前書き)

ライア

「作者...」

ん?

ライア

「一番最初に書いた四語を俺で書かせてくれよ~
いこよ~!」

ライア

「よつしゅ~!」

では第一話を作りたがって...」

心だ？此処は？

「お……て、……きて、お…きて…」

「なななー？喰らえ『アイアンテール』！」

大声で起しそれびっくりしたのか、起きた瞬間にアイアンテールを起こした相手に放つ

「ぐへえ！」

軽く10?ぐらい吹つ飛び吹つ飛んだ起動上にあつた石を破壊した

吹つ飛ばした相手の方に駆け寄り、謝った

「つあ！わりい、わりい」

「『わりい、わりい』じゃないよ！せつか砂浜に倒れていた君を
気遣つて起こしてあげたのに、ありがとうの代わりにアイアンテー
ルを出すなんて（泣）」

10?吹つ飛ばしたライトも凄いがコイツの生命力はもつと凄いら
しいまだピンピンしている

「それよりお前はなんて名前だ?」

「僕?僕はフシギダネのグリーン」

「俺はピチューのライトだ! 気球に乗つて旅をしてんだ!」

「なんで、旅をしているの?」

グリーンが聞いた

「それは、世界中のいろんなポケモン達と会つて、世界中の美味しい食べ物を食べる為だ!」

実はもつと重大な理由があるのだが今は伏せておこう

「……」

今のライトの発言に呆れてしまつて言葉を失うグリーン

「わつだ!—」の島はどこだか教えてくれない?

「つあ、いいよー!」『アース島』だよ!

この島の案内をするからついて来て!」

三分ぐらい歩くと町に着いた

数十分かけてこの町を案内し最後にグリーンは自分の家にライトを招待した

「ここが僕の家だよ！」

グリーンとライトは家に入つていった

その二人を遠くの木の陰から覗いている者が居たが、 続きは又今度にしよう！

なんだ?此処は? (後書き)

グリーン

「作者さん!」

何ですか?

ライト・グリーン

「お年玉ちゅーだい!」

つて、ライトビックから湧いてきた?

ライト

「扉をアイアンテールでぶつ壊して」

マジドー?.

……つあ

ひみつ、お年玉あげるから帰って?

ライト・グリーン

「やったー!」

うわ～ギリギリ

扉、吹っ飛んで壁を貫通してるよ～？

(あいつ本当にピチューか?)

じ、次回をお楽しみに～

又しても気球に乗つて（前書き）

グリーン

「作者さん次話投稿早くない？全回投稿してから一時間ぐらいしか経つてないよ？」

それは、一話、一話が短いからだよ

ライト

「そんな事よりグリーン早く、早く」

グリーン

「わかったわかった」

ライト&グリーン

「第二話をどうぞー！」

又しても氣球に乗つて

「うめえー！」

ライドが田の前に並べられた食べ物をほりほりながら囁つ

「そう言つてくれると嬉しい」

グリーンの父親、フシギバナが言つ

「ところで、グリーン

この辺りで右の頬に傷があるライチュウを見なかつたか？」

「見てないよ。どうしてそんな事聞くの？」

「あの～それは～兄さんが行方不明になつたから～るかな～と、
思つて」

「お兄さんが行方不明なんだ…つよしー僕も一緒にお兄さんを捜してあげるよー」

「本当か！？ありがとうー」

「お父さんここよね？」

「うーん……お前が行きたいって言つたら良しとしよう。」

「お父さんありがとう。ライアと待ち合つてね用意して来るか

ら。」

数分後

「お待たせ!」

ライアと回じよひ小さこ肩掛けのカバンを着けてグリーンがやつて來た

「よし……出発だ!」

そして、さつき畳た砂浜にやつて來た

「待て……」

ビーチからかずが聞こえてきた

「セイのピチューとフシギダネ、金をだしなー。」

「えー、やだ~」

「だったら力づくで奪つてやるー！」

草むらから声の主がやって来た

「俺はダーテングのサイズだ！金を出さないんだよな、だったら…」

「遅いー！」

サイズが技を出す前に電光石火で後ろに周り込んだライトが言い放つた

『『アイアンテール』！』

アイアンテールはみごとサイズの後頭部に直撃、ダーテングを吹つけ飛ばした

「雑魚が」

「グリーン！

「気球に乗ろー。」

しかし、グリーンは一瞬の出来事にびっくりして腰を抜かしている

「なんでライトはアイアンテールしか使わないの？」

数分後、やっと立ち直ったグリーンゼライドに聞いた

「それは、電気技を使つと反動を受けてやがてダメージ＆断絶しちゃうからなんだ！」

それより早く気球に乗るつよ~」

「うそー。」

又じてモモイロは風に身を任せた

又しても気球に乗って（後書き）

ライト

「あーあ作者さん寝けやつた」

グリーン

「僕達も寝よつた」

ライト

「やうするか

ライト&グリーン

「次回をお楽しみに！！」

お休み？

新しい島元（前書き）

ライト

「作者さん書くのはやー。」

だから一話、一話が短いからだよ

では、

ライト&グリーン

「第四話をじつぞー。」

新しい島に

「ライトー起きてーー！」

グリーンがライトを起こすと大声で呼んだ

「つわあーなんだ『アイアンテール』ー」

又してもグリーンに向かつてアイアンテールをお見舞いした

「げふう」

又してもーーーほじ吹つ飛ばされたグリーン

しかし今回はぶつかるのが当じやなくてたまたま通りかかったバン
ギラスだった

バンギラスはぶつかった後、5、6? ほじ吹つ飛び気絶した

吹つ飛ばされたグリーンは走つて逃げてしまった

(あいつ、よく生きてこられるな…)

グリーンの後を追いながらライトは頭の片隅で考えるのであった…

「ふう、疲れた」

ライトはグリーンを追つてやつて来た町に居た

そして近くに居た「ローンに話しかけた

「此処はなんて島つ島？」

「此処はロッキー島だ！此処に来るの初めてだりつへ案内してやるよ」

一通り案内して貰つた後おすすめのお店に案内してもらつた

「つまーい！」

厳選された木の実を使った木の実のソテーを食べながらライトとグリーンは言った

「せういえば今日の夕方からバトル大会があるんだつて出ようよー。」

「いいぜー。」

「じゃあ、参加するために参加者登録をしておけ。」

お会計を済ませて会場に走つて向かつた

「ライト様とグリーン様ですね？タッグバトルに登録しました。大会が始まるまで控え室でお待ち下さい。」

「グリーンが相手を足止めして俺が吹っ飛ばすっていう戦略でいいな？」

当たつた相手がかわいそのだなと思つたグリーンであつた

新しい島に（後書き）

……もう限界

バタリ

ライト&グリーン

「つあ」

ライト&グリーン

「合掌」

つて、人をかつてに殺すな！

バトル大会で父さんに（前書き）

初めて千文字以上書きました！

バトル大会で父をなんに

「バトルの相手が決まつたと聞いてライトとグリーンは相手を見に行つた

「つえ！一回戦に勝負かつて、相手がサイホーンとテッカーンのペアか、じゃあグリーンはサイホーンをテキトーに葬つておいて、俺はテッカーンを殺つておくから」

「葬つておいてってなんですか？」

「ん？そのままの意味だけど、何か？」

グリーンは身震いを抑えながらバトルフィールドにつきバトル開始の合図を待つた

「これより第1回戦を始めるー!!」
「…」

「おーい、チビちゃん達で勝てるのかなあー？」

始まつてやうやう相手のテッカーンが挑発をしてきた

「喋つてこるとやられると『アイアンテール』！」

一瞬でテッカーンの後ろに周り込むとマイアンテールを放つた

「ぐはあー。」

テッカーンは仲間のサイホーンに向かって吹っ飛ばされ
テッカーンはサイホーンまでを巻き込み両者は戦闘不能になつた

「テッカーン、サイホーン戦闘不能ーよつて勝者ピチュー、フジギ
ダネ！」

会場全体が静まり返つていたこの勝者がたつたの数十秒で終わつた
のもあるが勝つたのがサイホーンやテッカーンではなく、ピチュー
が勝つたからである

第2回戦目はカイリキーとハリテヤマといふなんかゴツいペアであ
つた

この勝負も一分も掛からずに終了した

「なあ、グリーン？敵が弱すぎむな

「はあー。？」

ライトの意味不明な発言に答えられないグリーンだつて、あの「ゴツ
いペアは第1回戦でレアコイルとマグカルゴのペアを開始三分でぶ
つ倒した優勝候補のペアだつたからだその前にグリーン自身は第1
回戦も第2回戦も立つて居るだけだつた

「なあ、グリーン第3回戦はルカリオとハツサムのペアだつてさ、
どう思つ?..」

「どう思つて、そのペアは昨年の優勝ペアだよ!」

「ふーん」

「反応薄つ!」

「つお、始まるみたいだぞ」

グリーンのツツミもむなしく無視されてしまつた

二人がバトルフィールドに着くとバトルが始まつた

「降参するなら今の内だぞ!」

ルカリオが口を開いた

「だから喋つてる暇があれば周りに気を配れ！－！『氣合いパンチ』！」

「なに！？『まもる』－！」

ルカリオは瞬時に対応して『まもる』を使った

「遅いな『フェイント』－！」

「ぐつ！」

「『ソーラービーム』－！」

太い光線が走つた！見るとハツサムが倒れていた

「ハツサム戦闘不能！」

「『葉っぱカッター』－！」

グリーンの放つた葉っぱカッターはルカリオに直撃した

「ツち！」

ルカリオは短く舌打ちした

「おつと、そつちばかりに氣を取られているとやられますよ『アイアンテール』」

ライトはルカリオがグリーンに氣を取られている隙に顔面にアイアンテールを放った

ルカリオは地面に叩きつけられると氣を失った

「ルカリオ戦闘不能！よつて勝者ピチュー、フシギダネ！」

観客席から無数の拍手が起きる

「ねえなんでライトは氣合いパンチやフェイントが使えたの」

「嗚呼、それは近所のカイリキーおじさんにみつちりと練習をせられたからだよ、格闘技ならほとんど使えるぜ」

「へえ～」

改めてびっくりするグリーンであった

「確か次が最後のバトルだったな、ん？相手がライチュウとカメリクス？やべえ」

「ん? どうしたの?」

「な、なんでもない」

明らかになんでもなくないがまあいいや

バトルフィールドに立つとすぐ「バトルが始まった

「つあー…やつぱり父さんか相手は

「ライトか決勝戦の所にピチューって書いてあって半信半疑だった
がやはりお前だつたみたいだな!」

「無駄話もそこまでだ『氣合パンチ』!」

「やつきたか、だつたら『雷パンチ』!」

「残念でした今は囮、『まもる』」

「つなー?」

「父さんだからって容赦しないぜ『アイアンテール』！」

ライトはまもるを使って隙を出させてアイアンテールをぶち込んだ

「ぐつーお前の攻撃は一発、一発が重いからなしかしこの勝負こっちが勝つた！タッグバトルってことを忘れているだろうそろそろ力メックスがフシギダネを倒して来るはずだ」

「おつとそれはどうかな？あいつは俺の本気のアイアンテールを受けても平氣だからなそろそろ例のが来ても良いんだけど」

「『ソーラービーム』」

「ぐはあーーー」

「カメリックス！？大丈夫か？」

「カメリックス戦闘不能」

「マジですか？これ？カメリックスやられちゃったよーーー？」

「だから容赦しないって言つたら？なあ、グリーン？」

「まあ」

「喰らえ！対父さんのために考へ出したこの技を『ロックバースト』！」

ライチュウ（父）に土の柱が何本もぶち当たつてライチュウ（父）宙を舞つて地面に落下してきたそしてそのときにはもう力尽きていた

「つて勝手に殺すな！」

バトル大会で父さんに（後書き）

僕は轟さんとコラボします！！

ライト

「なんでなんで？」

それは僕と轟さんはリアとフローハン

グリーン

「次回をお楽しみに！」

ライト達がどこかに行っちゃいました（前書き）

ライト

「轟さんの所に遊びに行つてくるね

ハア？

グリーン

「行ってくるね」

お、おい！！

言つちやつた……

ライト達がどこに行つたりやこました

えーとですね、ライト君とグリーン君達が轟さんの所に遊びに行つちゃつたんで、物語が進められなくなりました。

そう言つて訳でライト君とグリーン君の過去や今までの中に出できたポケモンのプロフィールなどを語つて行こうと思ひます
又、登場人物が嫌になる位少ないので次に仲間に入れて欲しい又は、出て来て欲しいと言うポケモンを大募集しています！メッセージに出来て欲しいポケモンを書いて、送つて下さい！お願ひします

「今日はそれで終わりか？」

「えーと、あんた誰だつけ？」

「自分で出しここで忘れるな…」ライトの父親だ！」

「えー？死んだはずの？」

「ん？ そう言えば足の感覚が無いような… って、違うわー…それよりはまだ生きとるわー！」

まだ成仏していなかつたのか……で、どんな心残りが？

「うむ、実は息子が……つて、なに言わすんじゃ…。」

『なに言わすんじゃ』つい、あんたが勝手に言つたんでしょーが！

「う、う、ま、まあ話を変えましょ、ライトは『ロックバースト』を使ったのに何故、土の柱が出たんですか？」

えーと、それはですね～バトルフィールドの地面がサラサラの土だつたからです、本来ならば地面から脚を出して立てるはずだったんですが、岩がなかつたらしこんです

「ほ～」

なんかいいで話のもなんですから、ちょっと飲みこでも

「お～良いですねーー行きましょ」

監督と今回まじれでお終いですー次回をお楽しみにー

「おこーーー早く行くぞー。」

つあ、待つて下さい！

サヨナラ？

ライト達がどこかに行つたりやこました（後書き）

ちょっと飲み過ぎました……

ウイー

気持ち悪いのでサヨナラ……

テキストプロファイル（前書き）

ライトの父

「五百文字つてなんだ！」

皆さんにお願いです！

アンケートに答えて下さー！

ライトの父親

「厚かましいにも程があるぞー！『ボルテッカー』！」

生身の人間にそれはないつて！ねえ、話ばわかる！止める、ギャー
——

ライトの父親

「第7話をどーぞ」

キャラクタープロフィール

おはようございます！たとえそちらが夜だとしてもおはようございます！私の朝は一口のヨーグルトから始まります！

さつそくですが、まだライト達は帰ってきません！しかも私未成年です！前回ライトの父に無理やり飲まされて気持ち悪いので、いります！

では、今まで登場したキャラクターのプロフィールを語っていきます！

ライト

この物語の主人公

年齢は、なんと七歳！

性別は

得意な技はアイアンテール

自分流の技をいくつも持っている

みんなに一言　いないのでなし！

グリーン

主人公の相棒：かもしだれ。

年齢は七歳！

性別は

得意な技はソーラービーム

今までカメックスなどに勝てたのはソーラービームを改良して一度にソーラービームを10発撃てるから。その代わりに溜める時間が長くなっている又、カメックスのハイドロポンプを20発受けても倒れないタフさを持つ

みんなに一言　いないのでなし

サイズ

一回しか出でこない謎の追い剥ぎ、実は吹っ飛ばれた後、帰らぬ人に……

ライトの父親

まだ酔っ払っていて、ポケセンから出でこない

ふー、疲れた、今日は終わりでーす

「ちよつとまでー、いくらなんでもいい加減過ぎるーしかも私の説明はなんだー酔っ払ってポケセンから出てこないつていい加減過ぎるー」

だつて面倒くさい

「面倒くせごじやねーよー」

じゃ次回をお楽しみに〜

トキョープロファイル（後書き）

ライターの父親

「あ、あとがきだ、つい本当に終わりせやがったー。」

もつねりせた

ライターの父親

「ふざけるなー。」

わかつたから次回いやせんといやれよーじやんー

あつ終わりせ

今回も短い（前書き）

ライトの父親

「前回の言葉最後まで言わせりよー。」

嫌だ

ライトの父親

「……」

第8話をどーぞ

ライトの父親

「……」

今回も短い

「今回せねえよとせねえよ。」

それよりさ、あんた主役じゃ無いんだよね。なんかこじわざとばかり出てきてるけど

「ガラ」

そうだ！！今から短編書くは！！

「H-H！」

/ / / / / / / / / / /

「死を支配する悪魔よ我が呼びかけに答え死を『えよ』『ブリハツドリ

一人?のポケモンが呪文らしき物を唱えると戦つているらしいポケモンの足元に赤い魔法陣が展開されそこから黒い煙らしきモノが現れた。

その煙は敵のポケモンを包み込んだ。そのポケモンはその場で倒れ激しく痙攣を起こし動かなくなつた。

そばに違うポケモンが駆け寄り、倒れたポケモンを揺する
突如、駆け寄ったポケモンの腹から生暖かい液体が溢れ出る、背中
には黒い長剣が刺さっていた。そのポケモンは自分の腹から溢れて

いる液体に触った後、それを見つめた沈黙が流れる、モンは悲鳴をあげたそして崩れ落ちるように倒れた。

刹那そのポケ

/ / / / / / / / /

ふうー

「いや、ふうー、じゃないかー。」

じゃあ終わりでーす！次回をお楽しみに！

今回も短い（後書き）

ライトの父親

「毎回毎回いい加減過ぎるわー。」

次回はいい加減にやつませんよー！

ライトの父親

「次回をお楽しみに」

帰つて來たか！（前書き）

ライトの父親

「日に日に文字数が…」

帰つて来たか！

ライ父

「ライ父ってなんだよ！」

いやー短くしただけですよ

ライ父

「……ハア、それより、前回の短編、少しカオスな感じだったけど物語と関係あるの？」

いや、一切関係無し！

ライ父

「！？」

実はあの時寝ぼけて書いたから記憶が一切無いんだよね～

ライ父

「それに今気づいたんだけど脱線が激しくない？もう、ただの漫才じゃん。ジャンルをコメティにした方が……」

ツギク！（痛い場所を突かれたな……）
うん……そろそろ頑張って書かなきゃ 読んでくれる人がいなくなつ
ちゃうから！

ライト

「ただいまー！」

お！帰つて來たか！

ライ父

「ライトちょっと來い

お前勝手に家から抜け出したから怒られないように逃げたんだろー！」

ライト

「やべーー！『ライトニングボルテッカー』ー！」

ライ父

「何故？電氣技を使えるをだ！？
グハーーー！」

ライト

「理由を知りたい人は轟さんの所へGOー！」

ナラル

(. | .)

" "

"

帰つて來たか！（後書き）

次回から本編に戻ります！電気技を使えるようになつたライト君、
これからも活躍をお楽しみに！

ライト

「頼んだぜーー！」

ストーリー再開！（前書き）

ライ父

「本当に文字数すぐねいな」

すいません（・。・。）

ストーリー再開！

「ライト、家に帰るぞ」

ライトが帰つて来て1田田の朝にライ父が言った

「嫌だ」

「凄い、簡単な返事だな…まあ、良い俺とバトルして勝つたらお前を家に連れて帰らないでいようー！」

「バトル大会で負けた奴がよく言つよ……」

「……」

当たり前の事を言われ言い返せないライ父

「あん時はあん時、今は今だ！バトルをするぞー！」

苦し紛れの言葉を吐く

「仕方ないなー電気技も使えるように成ったこと練習がてらこいつちゅやるかー！」

「容赦しないからなー！」

「同じよつな事を前回言われたよつな…」

「もうバトルは始まつてゐるぞ『ボルテッカー』！」

「いきなりそんな大技だしていいのか？『メガトンパンチ』！」

ボルテッカーとメガトンパンチがぶつかり合い爆発が起きる！

「ぐは！」

爆発の衝撃で吹つ飛ぶライ父

「これで最後だ！『雷電』！」

普通の雷の10倍はある電気がライ父に落ちる

「つがは！」

しかし、まだ行ける！

「まだ倒れないのかよー。」

そのとや、崖の上から岩が落ちてきた

「危ない！『アイアンテール』！」

岩はその一発で砕ける

「サンキュー！…フォース！」

「弟が死にそうだったから助けただけだよー」

フォースと言われたピチューが答えた

「まだバトルは終わっていないぞー！」

なんとも空氣の読めないライ父だ

「『アイアンテール』！」

ライトのアイアンテールがライ父の顔面にクリーンヒットきれいな弧を描いて吹っ飛ぶ

「ひでふー！」

ライ父はポケセンの壁にぶつかり意味不明な声を上げた

そして、ライ父がポケセン送りになつたのは言つまでもない……

ストーリー再開！（後書き）

フォース

「はじめまして！！

フォースです！

実は僕は一回だけ本編に出ていたんです！

第1話の後書きのライトの自己紹介は僕がしてましたんです！

これからよろしく！」

サヨナラ！

新しい仲間？（前書き）

ライ父
「よしー・今日もがんばるやー。」

お題を、二つの間にか前書きのスタンダードだな

ライ父
「氣にするなー。」

今回は作者が発言する部分が多いです

ライ父
「では、どうぞー。」

新しい仲間？

「勝つたから、旅を続けるからなー。」

ライトがライ父に言つ
定着したんだ こ言い方…

「待てーーー！」

頭を包帯でぐるぐる巻きにされたらいのライ父が言つ

余談だが、バトルの後、ポケセンの看護士にこうしてつ絞られたのは
言つまでもない

「なんだ？もう一度アイアンテールが喰らいたいのか（笑）」

「いや、いや、違います」

ライトの尻尾が銀色に輝き始めたのを見て、必死に弁解している
こんなのが父親で良いのか心配にもなってきます

「だったら何なんだ？」

「これを持って行きなさいー！」

ライトは2500ポケを手に入れた

「サンキュー……じゃあ行つて来るわー。」

「待て……。」

「せつしきからなんだよ。」

「俺も連れて行け！……。」

うん、お金渡して着いて来るつてどんな神経してんでしよう、意味
が有りません、しかも父の威厳がさっぱりとなくなっています

「　　」

返す言葉が見つから無い三人（ライト、グリーン、フォース）

『氣まずい空気が流れる……。』

「　　「怪我はびひすんだ！」」「

「つあ……が、まあびひこなるわ……多分」

「その多分が……。」

ポツリとグリーンが呟く。

そして、数日後……

「俺、復活！」

本当に大人なのでしょうか？子供じみた発言です

「　　」

またまた、しらけてしました。

「俺もう駄目だ……」

落ち込むライ父、新しい仲間？が入ったライト達は今回からは楽しい旅になりそうです！

「つあーーー！」

「どうした？」

「気球にこんな人数乗れなくね？

つて言うよりフォースは一つの間に着いてくる事になつたんだ？」

「いーじゅん、いーじゅん

「でも、気球どりすかんの？」

「気球、乗らなくて良いじゃん！」

「つあ、確かに…それ良いよ…ナイス…！フォース…！」

良くない、良くない！

タイトルに『気球に乗って旅します』、的な事書いてあんのに…

「よし…これからは、歩いたり、船に乗ったりしよう…！」

話、無視された…

新しい仲間？（後書き）

フォース

「次回をお楽しみに！－！」

ふー、仕事が終わつた

これで作者から金が貰える（笑）」

一度目のバトル大会（前書き）

ライ父

「おい！作者！フォースは金を貰つていんのに何で俺は貰え無いんだ！」

それは、フォース君に無理やり頼んだからであつて、ライ父は勝手に登場しているからだよ！

ライ父

「しかしそるい！
つあ！！作者がいない！ハテは、逃げたな！
では、どうぞ！」

一度目のバトル大会

「次はどこに行くの？」

「さあ、決めて無い」

「……」

「決めて無いのか、じゃあ、次にバトル大会があるオキシ島にでも行くか！」

ライ父が言う

「バトル大会…よっしゃ…行つてやる…」

「ライト、兄さん探しはどうするの…？」

「そんなん後回しだ！待ってるバトル大会！」

「……」

「そうそう、バトル大会で三回優勝した者はスクランブルタワーに

参加できるひしー

何故かライトをあおるライ父

(スクランブルタワーとはバトルタワーみたいな所である、唯一違うのはバトルがスクランブルバトルで戦う所だ
又、スクランブルバトルは一つのバトルフィールドで複数のポケモンが一緒にバトルするバトルの事である。
説明が長くなつたので本文に戻ります)

「なんか燃えてきた～！よし！早速オキシ島に向かうぞ！」

数日後

「おー、ここのがオキシ島か～」

「水タイプのポケモンがたくさん居ますね～」

「じゃあ、バトル大会にレッツゴー！」

数分後バトル大会の会場にやつて来た四人

「すいません、バトル大会に出たいんだけど」

「バトル大会の参加者ですね？バトル大会は六人パーティーの勝ち抜き戦です」

「すいません、俺達四人しか居ないんだけど……」

「六人じゃ無くても参加出来ますよ？」

「少し不利だけど……まあいいか！
名前を記入して……はい！」

「あの、チーム名も書いて戴けますか？」

「チーム名か……よし！ 槍雷、チーム槍雷です！」

「チーム槍雷さんですね？ 参加ありがとうございます。バトル大会は1日後に始まりますので、この島の観光をしたらどうですか？ いえ、スポート紹介しますよ？」

「本当ですか？ ありがとうございます！」

その後、仲間と、教えて貰つた観光スポットを周つていた

「なあ、ライト？バトル大会の事を詳しく教えてくれないか？」

「OK!!

まず最初に今回のバトル大会は六対六の勝ち抜き戦だ、また、バトルは第四回戦あるから出場チームは十六チームだ！そして、俺達のチーム名は槍雷だ！」

「待てライト、今六対六の勝ち抜き戦って言つたな？」

「ツギク！」

「どうしてくれてんだ！」つちが不利だろ！」

「まあまあ、いーじゃん別に」

「良くないわ！」

こんな会話をしながらスポットを周り終え、ライト達は宿に泊まつていた

「明日のバトル楽しみだな！」

「うん！久しづびのバトルだな～」

「なあ、グリーンはどうだ？」

「僕は別に楽しみでも無いし、嫌な訳でもないな」

「フーン」

「じゃあ明日のバトル大会に備えて早めに寝るかーお休みー。」

「お休み～」

「お休みー！」

「みんなお休み」

電気が消されライアーダンの中におひたつた

ゾーデリオの鳴き声でライト達は爽やかな朝を迎えた

「ふー、よく寝たな！」

「オハヨー」

「んー、まだ眠い…」

「朝か、おはよー」

ライト達は朝食を済ませてバトル大会の会場に向かつた

「えーと、俺達が最初に当たるチームは、チーム深蒼か、どうやら水タイプ中心のチームらしいな！」

「だつたらこっちが有利だな！ そうだな、グリーンー最初にお前が行け！！」

「えー？」

「グリーン頑張つてね～！」

バトルフィールドに無理やり押し出されるグリーン
グリーンはバトルフィールドについた

「今からチーム槍雷とチーム深蒼のバトルを始める。
バトルスタート！」

相手はオーダイルだった

「小さいからって容赦しないぞー！『ハイドロポンプ』！」

グリーンは避けようとしてしづに太陽エネルギーを吸収し始めた
オーダイルの放つたハイドロポンプが直撃するが無反応でいるしか
も動く事もせず太陽エネルギーを集めている

「おいおい、動かなくて勝てるのか？『ハイドロポンプ』！」

二度目のハイドロポンプも直撃するが動じひとつしない

「『ハイドロポンプ』！」

もう、普通のソーラービームなら放てる程太陽エネルギーを吸収し

てこらはすだが、まだグリーンは動じつとしない

「まだ倒れないのか？『ハイドロポンプ』！」

その時だった

「これで勝つ！『ソーラービーム・改』！」

普通のソーラービームの十倍はあるソーラービームがオーダイルに迫る

「う、うわ！」

避けようとするがハイドロポンプを放っていたのと、いきなりだった
のでオーダイルに直撃、そしてその一発でオーダイルは戦闘不能となってしまった

「ふー、疲れた！」

「オーダイル戦闘不能フジギダネの勝利！」

その後もグリーンが敵を圧倒しライト達の勝利となつた

一度目のバトル大会（後書き）

あのソーラービーム・改がグリーン君の必殺技だよ！

ライ父

「あんなの喰らつたら一溜まりもないな！」

次回もお楽しみに！

フォース

「皆さん！感想や評価待つてます！」

キャラクター紹介（前書き）

今回はバトル大会の途中だけキャラクター紹介します

ライ父

「いい加減な作者だな…」

キャラクター紹介

今回はキャラクターの紹介をしていきましょう！

ライ父

「前回やつたじゃん！」

あれは、見てわかるように意味不明な部分がありますからね～

ライト（ピチュー）

この物語の主人公

実は三男である

何よりもバトルが大好き話し方は少々乱暴
ケタ違いに強い

つい最近電気技が使えるようになった。
又、格闘技ならほとんど使える

一人称は俺

グリーン（フシギダネ）

ライトの相棒、かもしだれない

控えめな性格

耐久力がハンパない

自分で作つたオリジナル技の威力もハンパない

一人称は僕

ライ父 （ライチュウ）

ライトの父親

ライトの父親だが立場が危ない
しかも、ライトより立場が弱い
ライトよりは弱い
少し子供じみている

主に作者とのツツコミ役前書きではスタメンになっている
一人称は俺

フォース （ピチュー）

ライトの兄、次男であるおつとりとした性格
弟のライトを守つてあげたりとやつぱりお兄さんだなと思え所がある
ライトの数倍強い
ライトより多くのオリジナル技を保有している
一人称は僕

ライト達兄弟はバトルになると別人のように性格が豹変し言葉使い
も荒くなる

終わつた！

ライ父

「 やけに少ないな～」

仕方ないだろ出て来てるキャラクターが少ないんだから！

キャラクター紹介（後書き）

次回からはバトル大会に入ります！！

ライ父

「燃えてきた」！

バトル大会二回戦（前書き）

ライ父

「今回も頑めだな」

バトルシーンがあるとやっぱ伸びちゃうね

ライ父

「俺は活躍しているか？」

うーん、キャラが変わる

ライ父

「だけ？」

うん！でも君には大きな一歩だと想つよ

ライ父

「俺つて、一体……」

フォース

「では、第十四話をどうぞ～」

バトル大会二回戦

バトルを終えて自分チームの控え室に戻ってきたグリーン君

「勝てた〜、」

「グリーン君つて凄いね〜。あんなの見たこともないよ〜」

「それよりさ、次に当たるチームはど〜になるか観戦しに行こうぜ！」

「確かに、相手を知ることも大切だからな！」

珍しく、じもつともな発言をするライ父

バトルを見に行ってみるライト達

「ふーん、『獄炎』とか言うチームと、『インパクト』とか言うチームのバトルか」

バトルは獄炎のヘルガーがインパクトのカイリキーを圧倒的に圧し

ていた

「つち！『クロスチョップ』！」

カイリキーがクロスチョップを放つが難なく交わされてしまった

「『火炎放射』！」

ヘルガーがカイリキーに火炎放射を放つ

「つグフ！」

カイリキーはそれで倒されてしまった

「カイリキー戦闘不能！よつて勝利チーム、獄炎！」

会場が声援を上げる

「なあ、フォース、あのチームはよっぽど強いみたいだな、」

「うん、カイリキーがクロスチョップを放つた後の僅かな隙に火炎放
射を的確に決めているからね」

「それにしても、次にあのチームに当たるとしたらグリーンは不利になるな…」

「大丈夫だろ！俺達が倒せば良いんだから！」

「そんな事を言つてもな…」

「よし！！次は俺が出るー！」

「待てライト、この勝負は俺が出るー！」

ライ父が生まれ変わったかのようにキャラが変わっている

「じゃあ、控え室に戻つて、次のバトルが始まるのを待つてようぜ

！」

控え室に戻ってきたライト達

「そろそろ始まるなー！ワクワクするぜー！

後、親父！負けるなよー！負けたら承知しないぞー！」

「解つてるー！」

バトルフィールドに向かつて歩くライ父
そして、指定された場所に着く
敵はブーザーンらしい

「始めるてくれ！」

ライ父が言った

「つあ、はい。

今から、チーム獄炎対チーム雷槍のバトルを始める…バトルスター
ト…」

「これから行くぞ！『雷』…」

しかし、それを難なく交わすブーザーン

「かかつたな！『アイアンテール』！」

いつの間にか、ライ父は雷を避けたブーザーンの真横に回つてアイ
アンテールを放つた

「な、なに！？つグハ！」

後ろに吹つ飛ばされるブーザーン

「まだ攻撃は終わってないぞ『十万ボルト』！」

「グハ————」

十万ボルトをもろに喰らったブーバーンは戦闘不能になつた

「案外弱いな……」

その後も順調に勝つて行き敵も後一人となつた

「次は私の番か……」

ヘルガーがバトルフィールドに着く

「バトルスタート！」

「『アイアンテール』！」

始まつたと同時にライ父はヘルガーに走りよりアイアンテールを放つた

「なら」「ちらも『アイアンテール』！」

二人のアイアンテールがぶつかり合つた

「っく！」

激しい衝撃に後退するライ父

「油断し過ぎだ『穴を掘る』！」

「つグハ！」

「続けて『アイアンテール』！」

「つぐふ！」

ライ父はヘルガーのアイアンテールを喰らい氣絶してしまつた

「ライチュウ戦闘不能！ヘルガーの勝ち！」

その後、控え室に運ばれて来たライ父

「すまん、負けてしまった……」

「別に大丈夫だ！俺にまかしな！」

「頼んだ！ライト！」

バトルフィールドに立ったライト

「バトルスタート！」

「まずは俺から『電光石火』！」

姿が見えなくなつたライト

「隙あり！『アイアンテール』！」

「い、いつの間に！？つがは！」

「まだまだ！『サンダーアロー』！」

電気で出来た矢がヘルガーに向かつて飛んでいく

「『まもる』…」

ヘルガーはまもるを使いサンダーアローを回避した

「待つてましたー!『フェイント』ー!」

サンダーアローがまだ終わってない時に来たので下手に避けられず
にフェイントを受けてしまうヘルガー

「つぐふー!」

フィールドの端まで吹つ飛び壁にぶつかりヘルガーは戦闘不能とな
った

「ヘルガー戦闘不能ー!ピチューの勝ち!」

ライトの勝ちには会場がどよめく、ヘルガーが勝に決まつてみると
思つていたらしく

「やつぱり、ライトは強いや~」

控え室に戻ってきたライトに対してもフォースが話しかける

「フォースの方が強いんだからさ、そんな事言つなよー。」

「ライト、そろそろバトルが始まるみたいだよー。」

「よし……頑張るぞー！」

再びバトルフィールドに着くライトは敵を見て言葉を失った

「あ？ 有り得ないだろ……」

なんと敵は伝説のポケモン『ファイヤー』だったのだ

バトル大会二回戦（後書き）

ライト

「おい！ファイヤーって何だよ！」

いや～、出してみようかな～つと思つたから出した

ライト

「ハア……」

VSファイヤー（前書き）

ライト

「ガンガン感想書いてくれよ！」

グリーン

「第1~5話を……」

ライト、グリーン

「どうぞ！」

VSファイヤー

「こんなのは有利得ないだろ……」

伝説のポケモン、ファイヤーを目の当たりにし呆然となるライト

「バトルスタート！」

ライトは審判が出した試合開始の声で我に返った

「油断大敵だぞ『火炎放射』！」

「うわ！あぶねー」

ファイヤーの火炎放射をかろうじて避けたライト

「こっちからもやらせてもらひつぜー『雷』！」

ファイヤーは雷を避けた

「まだまだ～『電光石火』！『アイアンテール』！」

ライトは電光石火でファイヤーに近づきアイアンテールを放った

「雑魚としてはなかなかだな。しかしそれしきでは、私は倒れん『ゴットバード』！」

「真っ向勝負だ！『ボルテッカー・【火迅】』！」

ライトはファイサーの『ゴットバード』に対し、火を纏つたボルテッカーを使つた

二人の技がぶつかり合い、激しい爆発が起き煙がでる

そして、煙がはれた、

「俺の、負けだ……」

ライトはボルテッカーを使つた反動で倒れてしまった

「ピチュー戦闘不能！ファイサーの勝利！」

「私をここまで追いつめるとは、なかなかの者だ、しかし、所詮、雑魚は雑魚。雑魚ごときに私は負けやしない」

その発言を聞きライトの兄、フォースがキレた

「あのファイヤー、俺が殺る」

そして、バトルフィールドに向かつて歩いて行つた

「バトルスタート」

「雑魚は私に勝てやしない」

「もう言つて居られるのは今のうちだけだ…」

フォースが消える

「ど、どにテ消えた」

「テメーの後ろだ『アイアンテール』」

「『まわる』」

フォースのアイアンテールをまもるで防いだファイヤー
しかし、衝撃がくるか顔をしかめている

「つち、わざと当たれば楽になれるのに『雷双剣【ツイン・イン
ドラ】』」

フォースの両手に雷が落ちる、そして、フォースの両手には電氣で
出来た細身の短剣が握られていた

「行くぞ…」

また、一瞬でファイサーの視界から消えるフォース

「ひつなつたら『炎の渦』」

ファイサーは自分の周りに炎の渦を使い、壁を作った

「ふん、じやかしい」

フォースは電気の剣を振り炎の渦の壁を消し飛ばした

「な、なに…？」

「雑魚はお前だつたようだな…」

フォースは二つの電気の剣を合わせて一本の剣にし、ファイサーに振り下ろした

「私の…かんぱ…い…のよ…うだ

「ファイサー戦闘不能よつて勝者ピチュー」

「勝ったのか…」

そう言って、控え室に戻つていった…

VSファイヤー（後書き）

全国のファイヤー大好きさんすいません m(ーー)m
ファイヤーが悪役みたいな感じになってしましました…

又、フォースの性格が豹変しましたが、それは後々小説で出すので
待ってて下さい！

ライ父

「前書きに出てないぞ！」

いきなりなんだ！

物語を書く気が（前書き）

今回は表現描写が無いので、読みにくくこと思こます

ライ父

「ただ単に、面倒なだけじゃ……」

何か言つたか？

ライ父

「い、嫌何も、16話をじつねん」

物語を書く気が

今日は物語は進めません！そして、そのかわりにみんなで遊びまし
ょつーイエーイ、ヤツホー

ライ父

「何なんだ、この作者…ネジが外れたのか！？それより、こんな
で喜ぶ奴は……」

フォース

「やつたー！何じょうかな？（ワクワク）」

ライ父

「いた…（汗）」

じゃあ、みんなでバトルしよう！

ライア

「なに！？バトル！よつしゅー、やつせー！」

ライ父

「その前に俺の名前を……」

つん？じゅあねー、何じょうかな～

ライ父

「決めてなかつたんかい（汗）」

『じめん、『じめん今のは[冗談だよ、ライ父の名前はライチでした！』

ライチ

「おーーー！どんな名前じゃー女みたいじゃないかーしかも、もつね前
変わつてるし（泣）」

「と並びわざで並んでおこなが願いがあります、ライ父の名前を教えて
下さこー！そして、メッセージなどでの名前を送つて下さこー！お願
いしますー！」

ライ父

「つあ、戻つた……」

ライト

「バトルだ！『闘』ー！」

ライ父

「やつ始まつてんのー、つわーあぶねー」

グリーン

「では、僕も『マジカルリーフ』」

ライ父

「一人狙い無しだつて『十万ボルト』ふー、うまく相殺出来たみたいだ」

フォース

「つあ！おもしろそー『サンダーレイン』！」

ライ父

「つへ？電気の雨……つて、駄目だから、駄目だから～（泣）」

おー、本当に電気の雨だな～、小さな雷が雨みたいに降つてるよ～

ライ父

「俺は、まだ……やる事…が…あるの…つガク」

じゃあみんなでいつせーのせ、合掌

皆さん、一分間の默祷を

ライト

「死んじゃつたな」

グリーン

「うん」

ライ父

「まだ生きてるわー勝手に殺すなー！」

うわーお化けだ！
逃げろー

＝＝（^_^）

物語を書く気が（後書き）

ふーふーここまで来れば大丈夫

ライ父

「なにが大丈夫だ？」

じゃなかつたー

ライ父

「これは罰だ！『雷』」

ギャー——

ライトの新技！？（前書き）

ライ父

「まだ、俺の名前は募集中だぞー！見た人はガンガンメッセージや感想に書いてくれい！」

では17話を

ライ父

「どうぞ！」

ライトの新技!?

「やつたなー!フォース!」

ファイマーとのバトルに勝ち控え室に戻つて来たフォースにライトが話しかけた

「うー、頭がクラクラする~(泣)」

「大丈夫?ちょっと休んでなよ」

「もう少しゆるめ~」

「なあ、フォース、お前が試合中に使つた電気の剣すごかつたな!
教えてくれよ!」

「でも、今は……」

「兄ちゃん、教えてくれよ~」

「っん?兄ちゃん?よしー兄ちゃんが可愛い弟のために一肌脱いで

「やー...」

「よひしゃーー！」

「フォースって簡単だな...」

と、呟くグリーンであつた
その時アナウンスが流れた、

「今から、三時間の休憩に入ります。」

「つおー・ラッキー！」

「」の技は、使うポケモンで、出せる武器が違つんだ～

ライア達は近くの森奥地で技の練習をしていた

「ふーん、じゃあ俺の武器はなんだ？」

「技を出しきみないと解らなによ～」

「よつしゃー技を出して確かめてやるー。」

「Iの技の出し方は、両手に自分の中のエネルギーを凝縮し、その状態のまま、一気にエネルギーを手から放出して、形を変える技なんだ！」

「意味わからんねーや

「……まあ、まあやつてみた方が解るから…多分」

「つよしー…やるわー

ライトの手からバチバチと電気が出る
突如、雷がライトに向かって落ちる
そして、ライトは電気でできた鎖のついた鉄球を持っていた（鉄球は宙に浮いている）

「「「「おー」」」

ライトを包む全員が驚きの声を上げている

しかし、その鉄球は直ぐに消えてしまった

「あ～あ、消えちまつた

その後、数十回試したが消えてしまった

「何か、問題があるのかな～？」

「もうだーー轟の所で技を言つてから技を出すと良いつて聞いたぞ！」

「じゃあ技名を決めなきゃ」

すぐにつォースが賛成してくれた

「うーん、

『蒼雷球【テスペラードサンダー】なんかどうだ?』

「おー、良いくんじやない?」

「後、10分で試合が開始となります選手は控え室に戻り、バトルの準備をして下さい」

技を試そうとしたがアナウンスによつて練習は終わりとなつてしまつた

「仕方ないな、試合で試そーっと

「「「ツ HHー」「」

ライトの新技!?(後書き)

そういう、今回出た技みたこのを、これからこいつぱこ出かので、その技、名前も募集します!

ライ父

「俺の名前も募集しているのに厚かましい奴だな…」

良こじやん、良こじやん!

ライ父

「良くない、良くない…」

バトル1（前書き）

うーん、うまく書けない

ライ父

「こつもの事だろーー。」

うう（泣）

ライ父

「あーあ、では、18話を読みながー。」

バトル1

控え室に戻ったライト達

「なあ、次の大戦チームはどこだ？」

ライトがみんなに聞いた

「「うあ……」」

「そんな事考へてもなかつたよ（汗）なあグリーン？」

グリーンにライ父が聞いた

「えーとねえ、確かチーム『シンオウライフ』だったよ

さすがグリーン、ちゃんと調べてました

「シンオウライフって、どんな名前だよ（笑）」

「只今から、バトルを始めますバトルにでる代表者はフィールドに
出て下さー」

「おー始まつたか！じゃ あ誰がでる？」

「よし、俺が出よう

ライ父が言った

「じゃあ頼んだ！」

「只今から、『雷槍』と『シンオウライブ』のバトルを初める、では、バトル初め！」

ライ父の相手ポケモンはガブリアスだった

「まずは、オイラから行くぜい『ドリゴンクローザー』」

「『アイアンテール』から、『十万ボルト』！」

しかし、ガブリアスに十万ボルトは当たらなかつた

「へつへー、オイラにはそんな技は当たらないよー『破壊光線』」

破壊光線を紙一重でかわしたライ父

「あぶねー、しかし、破壊光線は出した後に隙が出来るのは忘れる

な！『アイアンテール』！」

ライ父のアイアンテールがガブリアスに当たる

「痛いなー、でもオイラはそれぐらいじゃ倒れないよ、『流星群』

！」

ガブリアスの手から無数のエネルギー弾が放たれた

ライ父は流星群をすべてまもるで防いだ

「『まもる』」

「じゃあ『フロイント』」

「『アイアンテール』！」

二人の技がぶつかり合つ

「『電気ショック』」

「『スピードスター』」

「だつたら『気合いパンチ』」

「オイラは『アイアンテール』」

「まだまだ、いくよー『ドラゴンダイブ』」

「真っ向勝負だ『ボルテッカー【虎冷】！』」

ガブリアスの『ドラゴンダイブ』と冷氣を纏つたボルテッカーがぶつかり爆発が起きる

「お前なかなかやるな！」

「そりゃうそー！」

「これで最後だ『雷放出』！」

「それはオイラもだ『彗星群』！」

ライ父の出した電気の波とガブリアスの流星群の強化された彗星群がぶつかり合い激しい爆発が起きた

「「「うーー」」

爆発で起きた衝撃波で吹き飛ばされた二人

「俺は限界だ……」

そしてライ父は崩れるように倒れた

バトル1（後書き）

まだまだ、募集中だよー。

ライ父

「お前、なかなか集まらないからってそれはないだろ」

気にするな！

またー? (前書き)

ライア

「新技つべりー、まゆ手て電気を流して帶状に放出つと
つぶんー」

おー! れを練習すれば……」

また！？

ライ父
「又かよ～」

いや今田は重大な発表があるんだよ～

ライ父
「マジーっ！」

うん、それはなんと、お前の名前を決めました！

ライ父
「それって、前書きでやればよくな～？」

あ……

ライ父

「こんな事してないで、さっそく、ストーリーを進めていればいい
ものを……」

ま、まあ、名前が決まった事だし、喜びまじょ～ね

ライ父

「で、どんな名前なんだ?」

食用

ライ父

「死にたいのか?」

わかりましたちやんとやります

ライ父の名前は.....
焼きにくん

「どこのまでとぼける気だ?」

わかつた、わかつた

ライ父の名前はユウキさんが考へてくれました、『ボルト』です!..

他にも名前を考えてくれた方々すいません

食用

「よーし、今日からボルトだ!..くん、名前が.....」

あつー間違えちゃったヨイショ

ボルト

「おーちゃんと直つてゐなー。」

ライト

「新技の練習『覇雷斬』」

ライドが手を横にふると電氣の刃が飛んできた

ボルト

「マジー!? 『まもる』」

しかしあのを簡単に切り裂くとボルトに直撃した

ボルト

「この、いつパ…ターン多く…な…いか?ッガク」

あーあ、又倒れちゃった

ライト

「完璧な弄られキャラだな…」

グリーン

「埋葬しなきやー。」

フォース

「『穴を掘る』…」

この中にボルトを……つと

ライト

「南無阿弥陀仏」

あれ？ 今回は、起きないね

また…？（後書き）

皆さん、やつぱり感想を貰えると嬉しいですよね～、だから感想を書いて下さい！

ボルト

「俺の名前にしても、技に関する「」の作者は厚かましいにもほどがある……」

つうわ！出たー！

今回は雑談でしたが直ぐに次話投稿するので、どうまで、ふざけていれば気が済むんだ！とかの感想は無しにして下さいね～！では！

= = (= ^_ ^)

ボルト

「」の作者は……ハアー

バトル2（前書き）

ライト

「今日は俺が大活躍！」

ボルト

「では、20話を…」

ビッグ！

ボルト

「言いたかったのに（泣）

バトル2

「次は俺がでるか……」

そう言つとライトはバトルフィールドに向かつて歩いて行つた

「バトル初め！」

審判がバトル開始の合図と共にライトは飛び出した

「相手は弱つている、だつたらこれで決めるか…『アイアンテール』

「

ライトはガブリアスの背後を取るとアイアンテールを放つた

「な！？ つぐは！」

ガブリアスは前方に吹つ飛び気絶した

「ガブリアス戦闘不能ピチューの勝利」

次に対戦する相手になつたのは、ビーケインだつた

「バトル初め！」

「では、私から『攻撃指令』」

たくさんの蜂がライトに向かつて突つ込んでくる

「『十万ボルト・界』」

ライトは十万ボルトを自分の周りを囲むように放ち蜂を焼き捨てた

「『毒針』」

ライトはサイドステップで毒針をすべて避けた

「『霸雷斬』」

電気の刃がビーコインに向かつて飛んで行く

「『まもる』」

しかし、霸雷斬はまもるを切り裂いてビーコインに当たった

「きやあー！でも、大丈夫」『回復指令』

ビーコインの傷を蜂達が直していく

「『雷』」

雷がビーコインに落として行く

「効かないわよ」『防御指令』

今までビーコインの傷を直していた蜂が雷を防いだ

「いやらも行くわよ『真空刃』」

蜂とビーコインが羽を小刻みに動かし、振動で刃を作り攻撃してきた

ライトはそれを上に飛びよけた

「行くぜ！」蒼雷球【デスペラードサンダー】』

雷がライトに当たる

そしてライトは電気でできた鉄球を持っていた

「行くぜ！」

ライトは鎖を振り回し鉄球を振り下ろした

「ハリなつたら『鉄壁指令』」

防御指令の10倍はあるつ蜂が集まりビーコインを守ろうとしたしかし、ビーコインの必死の抵抗も虚しく、鉄球は蜂の大群を蹴散らしながら、ビーコインに当たった

「つうー！」

ビーコインは吹っ飛ばされ壁に激突した

「ハアハア『完全治癒指令』」

ビーコインの周りに蜂が集まり始めた

「 もせない！ 『 霸雷斬 』 『 霸雷斬 』 『

2つの霸雷斬がビーグインに飛んでいく

「 『 防御指令 』 」

ビーグインは防御指令で霸雷斬を防いだ

「 『 特攻指令 』 」

蜂がライトに向かつて飛んでくる

「 『 十万ボルト・界 』 」

ライトは十万ボルト・界で蜂を防ぎました、しかし、蜂は十万ボルトに触れると爆発を起こした

「 な、なんだこりやー！？」

爆発によりダメージを受けてしまったライト

「 その蜂はダメージを受けると爆発するよひになつてゐるの 」

「 そりや 厄介だな… 」

ライトは突如、自分の持っていた、鉄球と鎖の連結部分を切り離した電気で出来ているのでそつこつことは簡単に出来るのだ

「 つめりー・プレゼントだー！」

ライトは切り離した鉄球をアイアンテールで飛ばした

「そんな物『鉄壁指令』」

蜂が鉄球を包み込む

「油断したなー。」

ライトは鎧を尻尾に吸收させた

「『アイアンテール』」

電気を纏つたアイアンテールをビーグインに放つた

「あやー。」

ドオオオン！

ビーグインは地面に叩きつけられ氣絶した

「ビーグイン戦闘不能ピチューの勝利！」

「よひしゃー。」

そして、次の敵と戦う為にバトルフィールドに立った……

バトル2（後書き）

ライト

「そろそろ、バトル大会が終わるな！」

うん

グリーン

「ところでさ、この物語の目的ってなに？ 兄さん探し？ 美味しい物探し？ バトル大会？」

うーん、たしかに、最初とは全然違つ話になってきてるよ（汗）

ライト

「いいかげんだな…」

バトル3（前書き）

今回は笑い有り？涙無しの下らないバトルストーリー

では、どうぞ！

バトル3

バトルフィールドにレントラーが上がってきた

「バトル初め！」

「手始めに『霸雷斬』」

レントラーは上に跳んでよけた、しかしいきなり、レントラーは地面に叩きつけられた

「どう？ 高速移動で直ぐに上にいきアイアンテールで地面に叩きつける連続技？ 痛いだろ？」

「このチビが…『スピードスター』」

ライトはスピードスターを放電を使い相殺させた

「『雷』」

ライトに向かつて真上から雷が落ちる、ライトはバックステップで回避した

「『サンダーバード』…」

ライトは電気で鳥を作り上げ、レントラーに向かつて飛ばした

「『アイアンテール』」レントラーはサンダーバードをアイアンテ

ールで破壊した

「『氣合いパンチ』」

サンダーバードに乗っていたライトは飛び降りると同時に氣合いパンチをレントラーに放った

「『アイアンテール』」

ライトの氣合いパンチはレントラーの体にレントラーのアイアンテールはライトの体に当たり両者は吹っ飛んだ

「なかなかやるな…」

「そちらこそ…」

突如、レントラーは体をふり、粉を飛ばした

「ウオリヤヤヤヤヤヤヤくらえい『粉塵爆はあああ』」

レントラーが微力の電気を周りに流すとレントラーとライトを巻き込んで大爆発を起こした

煙が晴れた

「行くぜYO！『アイアンテール』」

ライトがアイアンテールを放つ

「なにおおー『噛み碎く』」

ライトはレントラーの下顎にアイアンテールを当てる

「グヘニヒ」

上空にヨダレを垂らしながら吹つ飛んだレントラー、ヨダレは太陽の光を反射して光輝き、レントラーは白皿を剥いていた地面に落下したレントラーは詰つまでもなく氣絶していた

「レントラー戦闘不能ピチューの勝利！」

ライトはレントラーに勝つたのだが、粉塵爆破の影響でかなりのダメージを受けていた

しかし、ライトは交代しようとせずバトルフィールドに残った

バトル3（後書き）

ボルト

「絶対にレントラリーのヨダレはつけ狙いだな…」

グリーン

「うん…」

バトル最終ラウンド（前書き）

ライト

「バトルに決着が着くんだな！」

うん

ライト

「では、第22話をどうぞ！」

バトル最終ラウンド

「チーム『シンオウライフ』は残り一人です」

なんと、シンオウライフは雷槍と同じでチームは4人のようだった。

最後の相手は『ゴウカザル』だった

「バトル初め!」

「『蒼雷球【デスペラードサンダー】』」

鉄球を作り出したライト

「行くぜ!』『マッハパンチ』」

ライトは鉄球をぶつけ回避した
しかし、三回連續で戦闘を行つた為にライトは肩で息をしている状態だった

「ハアハア……俺の最後攻撃を見せてやるよ!』蒼雷球【真花】』

ライトが鉄球にエネルギーを流し込むと鉄球に無数のトゲが現れた

「『マッハパンチ』」

「『花雷球【散】』」「

ゴウカザルがマツハパンチで攻撃してきた所に赤くなつた鉄球をぶつけたそのとたん、鉄球が爆破を起こした
そして、ライトはその場に倒れた
フィールドは深くえぐれていた

「ピチュ―戦闘不能ゴウカザルの勝利」

なんとゴウカザルはボロボロになりながらも倒れていなかつた

ライトを運び終わつたチームメンバーは次に誰が出るかを決める事にした

「僕が行くか……」

フォースがバトルフィールドに出た

「バトル初め！」

「『『雷双剣』ツイン・インドラ』『』」

フォースは双剣をだした

「厄介なピチュ―達だな…『ブラストバーン』」

「僕には勝てない『ギ テイン』」「

豪火と白い雷がぶつかり合つ

突如、ゴウカザルの周りで爆発が起きた

「どうだい？僕のアローレイン・爆はギ ディンを放つ前に出して
おいたんだ」

爆発でブラストバーンが中断された事により、フォースのギ ディ
ンがゴウカザルに直撃した

「しまつ、グアアアアア」

ライトの技によりかなりの体力が減つており、ゴウカザルは倒れた

「ゴウカザル戦闘不能！よつて勝者。ピチュー、チーム『雷槍』の優
勝！」

「やつた～！」

いつの間にか回復した（つはやー）ライトが飛び上がっている

その後、表彰を終えたライト達は前回泊まった宿の前に来ていた

「勝てたな…」

「うん、嬉しいな～」

今回の勝利を喜び合う四人

その時、後ろから「ゴツい体つきのポケモンが走つて來た

「な、なんだびっくりした！」

「ドサイドンのパトリオットと言つものだ、今回のバトルを見て感
激した、どうか仲間に入らせて貰えないか？」

「別に良いけど……」

「本當か！かたじけない」

「ひしてなんだかんだで新しい仲間を手に入れたライト達であった。

バトル最終ラウンド（後書き）

ライト

「パトリオット達と遊びに行ってくれるね～行くぞグリーン！」

グリーン

「ええー！？うわああああー！」

パトリオット

「『』穴を掘る『』

床にあ、穴が……（泣）

ボルト

「もしかして、また？」

ライトからボルトへ、ライトの旅「裏」の始まり（前書き）

ボルト

「なあ、288文字つて異様に短くないか？」

まあ、新しい話の初まりだからね～

ボルト

「そんなんで良いのか？」

ライトからボルトへ、ライトの旅〔裏〕の始まり

ボルト
「ライト達どこに行つたんだ？」

知らない

ボルト
「ええ～！作者なのに？」

うん、チート野郎だから、どこに行つても戻つて来ると思つけど

ボルト
「待てよ、ライト達が居ないなら俺が主役でいいじゃないか！！！」

ボルト

「じゃあ、僕は主役の相棒～！！」

フォース
あらり、皆さん乗り気ですね～（汗）

ボルト、フォース

「では、どうぞ！」

ライト達が居なくなつた後、ボルトとフォースは途方にくれていた

「ハア～、どうする？フォース？」

「じゃあ、暇つぶしになんでも屋をやって、いろんな人達を助けようよ~」

そして、できたなんでも屋『何かが出来る屋』…。あーてどうな
事やら、サッパリわかりません

ライトからボルトへ、ライトの旅〔裏〕の始まり（後書き）

そろそろ、キャラ投票したりっ♪と言つアドバイスを友達から貰つたので今回からキャラ投票を初めます！
どうか、皆さんキャラ投票よろしくお願ひします！

依頼だ、依頼！（前書き）

フォース

「今回も少ないな～」

いつもの事じゃないか！！

では、第24話を

フォース

「どうぞ～」

依頼だ、依頼！

『何かが出来る屋』 びつみても、怪しいネーミングのこの店はあります間に街の話題にな……らなかつた

「うう、名前が適當過ぎたかな～、誰も来ないよ～（泣）」

「確かに、誰も来やしないな」

その時

カラソ、ロロン

どこかの『バー』 つか！なんて言つ突つ込みが飛んできそつな音を
出して扉が開いた

「どうも～、ありがとうございました～

「おー！帰んのかよ！…」
一人はつるつとずつこけた

「冗談、冗談、実はお願ひがありまして」

「お願ひってなに？」

田をキラキラさせながらフォースが聞く

「（汗）実は、断崖絶壁に生えてると言われるサカス草を探つて
きて欲しいんです…」

サカス草とはどんな病氣にも効く幻の薬草だ

「なんぞそんな物を？もしかして、お母さんはおばあちゃんが不治の
病だつたりするの？」

「いえ、お母さんは元気だし、おばあちゃんは毎朝10キロのランニ
ングをするほどのペッピンです」

「じゃあ、」

「いえ、おじこちゃんや妹でもありますん」

ボルトが机の前に回答した依頼人

「うーー（泣）じゃあなんでサカス草を？」

「いやー、ちよつと金儲けを…」

「「はい、帰れー」」

ボルト達のなんでも屋は大変なお店になつたのです（笑）

依頼だ、依頼！（後書き）

まだ、キャラ投票は続いてますよ～！――皆さんふるって参加下さい！
キャラ投票で多かったキャラは……

せんせーじゅつなかが出来る屋（前書き）

れしゃべりなんる一変な密しか来ない怪しこお店何かが出来る屋

ボルト

「読者の皆さん期待をしない方が良くてですよ~」

「ひねもん」

わざわざおいでなされた何かが出来る園

わざわざで今回ばかりなお客様が来てくれるのでしょうか?

「前回の密はひくでなしだったし、ちゃんととしたお密をひく来てくれるのかな~?」

カラソ、ロロン

ビーナス、密が来たよひります

「お願いしまー。わざの話を考えててくれませんか?」

体中アザだらけのボッ「ボッ」になつたわざの密でした。ビーナス達にせられたようですが

「わざかひむわざにな~」ハイジング「シズ」

かなりの電圧の電気が密に当たる

「ヒギヤーーーー

黒じげになつて、プスプスと音をたててこる

「これで、懲りたかな~?」

「 わあ？ わからぬー 」

その後、黒いじげの密を「 ハハ 」捨て場に運び捨ててきた

「 普通の密は来ないのかな～ 」

突如、扉が勢いよく開いた。そしてそこにいたのは、銀色の毛並みのイーブイだった

「 追われているんです！！ 助けて下さー！ 」

イーブイが慌てた様子で言つ

「 わかつた！ 隠れていて 」

店の扉が開かれて、ザングースが入ってきた

「 おこーこーに居るのはわかつてんだー 出てきやがれー 」

「 も～、小さい子をいじめるのは良くないよ～ 」

フォースがザングースに言つ

「 うるせえー 」

「 言つてわからないなら力で聞かせようつかな～ 」

「つはー！」こんなチビにそんな事言わるとほ、嘗められたもんだな
！良いだろ？、前の空き地でやつてやる」

空き地にやつて来たボルト一行とザングース

「ハア、あんまり使いたく無いんだけど『千万ボルト』」

ザングースに千万ボルトが当たる
そのまま、倒れて動かなくなつた

「ふー、案外簡単に片付いたな～」

その光景をポカンと見ていたイーブイ

「あー、血口紹介してしませんでしたね、イーブイのソウです」

「僕は、フォースだよ～」

「俺はフォースの父のボルトだ！」

「ねえ、ソウ君～、なんでザングースに追われていたの？」

「実は、商品街でさつきのザングースにぶつかつたらいきなり絡まれて逃げて来たと言う訳です、それに、見ての通り普通のイーブ

イと違ひてこるので、田舎ばかりでなく、あこがれのなること

です」

「じゃあ、僕達が守つてあげるよ～」

「嗚呼、俺も賛成だー・ようしくなーーー。」

「ありがとうございますー・これからみじかくお願いしますー。」

こうして、新しい仲間、色違いイーブイのソウが新しく仲間になったボルト達、これからどうなってこられるのでしょうか？楽しみにしてましよう

せんせいじゅつなんの何かが出来る屋（後輩たち）

ソウ

「歯をよみがへて願いしまさー。ソウドナー。」

ソウ君はボルト達の中で一番っこ子だよ。…多分

ボルト

「多分かよ。…」

（氣にするなー）

何も無い一日？（前書き）

ボルト

「み、見にくい文章だ……」

小説から抹殺しようつか？

ボルト

「す、す、す、すいません」

何も無い一日?

わざわざどうなる、ボルト達!?

ソウ君が仲間になり、一層賑やかになった。訳では無い何かが出来る屋

「客が来ないな~」

「暇ですね」

「誰でも良いから来て~」

「そんな事言つたら、又来たりして、あの客が」

カラーン、ゴロン

「お願いしま.....グヘホー~」

本当に来ました(汗)でも今回はボルトのアイアンテールで、すべ
にぶつ飛んで行つたけど

「ほ、本当に来るとは.....」

カラーン、ゴロン

扉を開けたのは、一人のヨマワルだった

「今日は居ないよ~」
「アリス、ライトって奴はいるか?」

「今は居ないよ~」

「アリス……」

やつらのマワフルは出て行った

「何だつたんだろ?」

「知らないな」

「どうゆうライトさんって誰ですか?」

「つあ!…そウには言つてなかつたな!」

「そして、ライトやグリーんの事説明されたソウ

「ふーん、ライトさんはフォースさんの弟なんですね!」

「うふー…アリスだよ~」

「うひじて一日が終わった

今回のヨマワルは何だったのか?そしてソウ君の実力はいかに!?

何も無い一日？（後書き）

まだ、キャラ投票は行っています

ソウ
「待つてます！」

短いけど、長い話（前書き）

ボルト

「何だこの題名？」

自分でもわからない（笑）

ボルト

「ハア～」

短いけど、長い話

「ううー、まだ眠いよー」

朝一番に起きたのはフォースだった

「ソウ起きしー」

「んんー、何ですか?」

「良いこと都想んだよー(笑)」

「どんな事ですか?」

「あのねー、あれをそいやつて、あーやつて……」

「フフフ(笑) それは面白いですねー(笑)」

子供一人は起きていって、一人は寝ていると聞いて思いつく人は思いつきますよね~

「ふあー、よく寝たなー」

「「クスクス……(笑)」」

「どうしたんだ?何か顔についてるか?」

「「勿論です（笑）」

「なにがついてるんだ？」

洗面所に向かつたボルトが鏡を見て悲鳴^鳴をあげたのは言つまでもない
そう、顔には油性マジックで落書きがしてあり、その上、頭にヒル
が大量にくつ付いていたのである

「二入ちょっと来い（怒）」

その後、3時間程度のお説教をされた二人であった

短いけど、長い話（後書き）

ボルト

「なんか、ソウの性格がどんなものかが心配に……」

キャラ投票はまだまだ続きます！

フォース

「次話をお楽しみに～」

おぬのね話(前書き)

ボルト

「俺の扱い酷くね?」

気にするな!

ボルト

「ハア~(泣)」

あーあ泣いたやつた(笑)

フォース

「28話をどうぞ~」

轟の感想を見たらある作者もんにチート集団と書かれているのを見て、そんなにひどいチート集団なのかと思ひチートをなんとかしようとがんばって……と思わなかつた今日この頃です
愚痴ですね…………

はいー本題に入りますよー

「今日は客がくるかな」

そう言いながら、椅子に座つたボルト

「痛つたーー」

そして、椅子から飛び上がつた
椅子を見るとい画鉢が置いてあつた

「フフフ（笑）」

それを見て笑い出したソウ

「つで、またお前かー！」

前回の悪戯がよほど楽しかったのか、悪戯を繰り返していくようですが

「これは、お仕置きだ！『アイアンテール』」

「痛いのは嫌いなんで『まもる』」

アイアンテールをまもるで防いだソウ

「生意氣な『十万ボルト』」

「だから痛いのは嫌いなんです『サウザントカッター』」

十万ボルトといくつもの真空波がぶつかる

しかし、真空波の数がとても多く多かつたので相殺されなかつた
真空波がボルトにあたる

「なんで俺は一番弱いんだ…バタ」（チーン

ボルト撃沈

カラーン、コロン

一人のコースが入つてきた

「依頼がありまして、この頃、私の家に幽霊が出るのです、どうし
か出来ますか？」

お前が幽霊だろーっと言つしち ロリは無しだ
そして返答は.....

「お祓いしてもうえ」

いつの間にか復活したボルトがいった
い、いい加減過ぎる

「そんな事が出来るんですか！ありがとうございます」

納得した——（汗）

「これはお禮です、かなめ石つて言つ口ひしこです」

コースはさう言つて細長い石を置いていった

「なんだらか、この石」

「ああ～」

まあ、依頼は解決？ですね！

ソウ

「悪戯つて楽しいな、楽しいな

キャラ崩壊に向かうソウはざつなる事やり

フォース

「僕も悪戯やるやん〜ー！」

完璧に子供だなあ

ボルト

ハア～

ハア～（泣）

ボルト

「作者どうしたんだ！？」

いや、前回のにへんな事書いたでしょ

それがね、ある作者さんからすぐに謝罪が感想に送られて来たんだ

……

ボルト

「それでどうしたんだ？」

誤解をもたれてしまつよつな、事をしたから、返事をしたけど、せつかく読んでくれているのに、それを裏切るよつな、事を書く自分はどうなんだろつて思つてさ……

ボルト

「……」

だからや、そんなひどい自分は『なるつ』から退会した方が良いのかなつて思つて、第一ぐだらなさすぎるから、いなくなつてもいいし

ボルト

「まで、までこの小説を読んでくれている人は一杯いるはずだぞ！
毎日ゴーークは70は超えるんだから、だからそんな事は考えるな
！」

その70は毎日更新しているから、いろいろな小説を回つてる人が

たまたまみて行くからいくだけだから

ボルト

「おい、おい、いつものポジティブ精神はどうしたんだよ、作者ら
しくないぞ」

ハア～、もう駄目だ……自分は最悪な人間だ……

ボルト

「このまま行くと、どうなるかが解らなくなるので、やううならー。」

謎のポケモン（前書き）

ボルト

「作者あれから動かないな……」

ソウ

「うん……」

謎のポケモン

作者復活！

ボルト

「は、早い……」

いや、感想でライトの旅が面白いって言つてくれた、人がいてくれたから、元気が出たから復活出来たんだ！

では！

晴れたなら一緒に、明日はきっと前に進め！行くぜーＹＯ！

暗い部屋に声が響く

「ライトを連れて来いといったはずだが、どうして居ないのかねえ？ヨマワル？」

「す、すこませんーハイド様。ちよびりライトは不在だったようすで

……

「居ないのなら探すべきだろー。」

「……

「まあ良かろう、ボルト達の見張りを続けるんだ

「ははー。」

セツヒトヨマワルは消えた

ボルト達

「なあ、フォース、なんか、ビニから見られている気がしないか?」

「ん~と、その木の後ろかな『斬裂雷ー。』」

そばにあった木が真っ二つに切られた

「見つかったか……『闇の波動』」

木の後ろに隠れていたヨマワルが飛び出して闇の波動を放つてきた

「はじめまして、そしてさよならー。『サウザントカッター』ー。」

いきなり飛び出してきたソウが真空波を放つた

「はひ!?」

いきなりのことで対応出来なかつたヨマワルは真空波で体を切り刻まれ倒れた

「ここへ、貧弱いな……」

「うん……」

「確か」「……」

わいわい、このアマワルは何者なのだー
それは次回のお楽しみ

謎のポケモン（後書き）

今、復活してもこつ退会するかはわかりません！

ボルト

「絶対に退会しない気がする…」

雑魚ばつか（前書き）

ボルト

「どんなタイトルだよ……」

タイトルは本文にちょっと関係します？

ボルト

「いい加減だな……」

P · S

パトリオットが死亡しました

ボルト

「…………」

雑魚ばつか

「コマワルをスマキにしたボルト達、このコマワルは何なのか！？」

「コマワルさんよ、なんで俺らの事を覗いていたのかな～？」

なんか不良のようにコマワルに事情聴取をするボルト

「いやあのハイド様から命令で……ハツ

なんとも口が軽いコマワルさん

「そのハイドっつー奴に命令されていたんだな～？」

「……」

「答えるって言つてんだよ～！」

ボルトは元不良なのでしょうか？

ハイドとか叫う奴の所

「おい！ゲンガーよ、どうやらコマワルが捕まつたらしく、コマワルとボルト達の排除を頼むー！」

「ケツケツケ～了解だ！行へぜ～部下達ーー！」

ゲンガー達は闇に消えていった

戻つてボルト達の所

「言わないんだな？では、拷問開始！」

「それだけは勘弁を（泣）」

「問答無用！『百万ボルト』！」

しかしその百万ボルトは薄い膜によつた防がれた

「俺らだぜ～」

ボルト達の目の前にはゲンガーと複数のゴース、ゴーストが立つて
いた（浮いていた）

「ソウは俺とゴース、ゴーストどもをやるぞー！フォースはゲンガ
ーを頼んだ」

「ケツケツケ、『シャドーボール』！」

ゲンガーがシャドーボールを放つた

「『霸雷斬』！」

フォースが霸雷斬でシャドーボールを切り裂きゲンガーに直撃した

「チックショー『悪のはどう』」

「無駄だよ『サウザントカッター・炎』」

ゴーストどもとの勝負を一瞬で終わらしたソウが炎の真空波を放つた
炎の真空波の一部が悪のはどうを相殺ほとんどがゲンガーにあたる

「まだまだぜ～『シャドークロウ』」

「懲りない奴『ボルトテッカー』」

ボルトも参戦しボルトテッカーを放つた

ボルトテッカーはゲンガーに決まりゲンガーが倒れた

「来る奴全員弱いな…」

あんた達が強いの！

その後、ゲンガー達もスマキにされたのは言つまでもない

P-S

ボルトテッカーはボルテッカーの間違いではありません

雑魚ばっか（後書き）

ボルト

「ボルトテッカーって何だよ！！」

名前が思いつかなかつたからテキトーにつけた

ボルト

「ハア～（泣）」

「つむぎ！」（前書き）

これが「つむぎ」なるかがわつぱり解らなくなつてきました……

ボルト
「ハア～」

いつもPMA!

「今日も密が二ねーーーどうなつてんだーはじめてからかなりの日
にちたつぞーーー」

つえ、ヨマワル達はどうなつたかつて、それは、その一、感想書いてくれたらお教えします

六
六
六

「お前、『うつふう』に書いても感想書いてくれ無いのを逆手にとつて、理由を書かないなんて卑怯にもほどがあるー！」

死んだはずの君が何故ここに……

「説明は後であるちよつとーーー！」

卷之三

視点変更

「つちー！ 真っ暗過ぎて右も左もわからねー！」

「いたぞー！援軍を頼む！」

「見つかったか…走つて逃げるか…」

そう言い残すとポケモンは走つて消えていった

ボルト達ーー！

カラソ、ロロン

「ボルトーお前らしき奴がここに居るって聞いてやつて来たぞ～」

そう言いながら一人のスマクローが入ってきた

「おおーぬまつちやん

「ぬまつちやんはやめられて（笑）」

「とにかくここまで来たんだ？んぬまつちやん

「それはだな…とその前に会いに葉『ただ日々の中で 楽しむだけ』つはい！」

「『今こ葉はいつもマニア』」

「OKー！」

「実はだな…旅を始めたんだ！」

「大丈夫か？」

「勿論だ！」

「じゃあ大丈夫だな！」

「じゃあな！」

「また会おうぜ！」

これからが全くわかりません！

こつもＰＺＡ！（後書き）

皆さんにお願いです！

悪い点ばかりを一杯かいただけの感想でも良いので感想を書いて下
さい

自分のためになるので！改善できる部分は改善して行きます！

ボルト

「待ってるぜー。」

誰がんお待ちかねの……（前書き）

ボルト

「なんだこのタイトル？」

『氣にしない！
どうぞ！』

皆さんお待ちかねの……

さあさあ、皆さんお待ちかねの無駄話！

ボルト

「誰が待つてんだよ！」

フォース

「ハーアー！」

こいつ

で今思つたんだけど、フォースのキャラ崩壊、どんどん天然さが激しくなつて行く事について話合います！

どうです！少し真面目でしょ

ボルト

「どこが……」

しかも今回は只今新しく執筆している小説の主人公とそのお友達にも登場していただきます！

翠波

「シャワーズの翠波です！」

炎斬

「ちーすー！ゴウカザルの炎斬だ！」

ボルト

「こんな事していいのかよ……」

フォース

「後輩だ～！～よろしく～！」

何故フォースはキャラ崩壊をしてしまったかを話合いましょう！
フォースがキャラ崩壊を起こしたのはたしか、轟と二回目の「ラボ」
をしてボルトが何でも屋を始めた所らへんからです！

炎斬

「それはただ単に作者があんなことやそんなことを始めたからじゃ
ね？」

翠波

「絶対に作者が変人さんにおもわれるから！」

ボルト

「作者のスランプが問題だ！……多分」

「ん～それは無いと思う……きっと自分が寝坊ながら書いたからだと
思う

翠波

「分かつてんなら最初からそんなこと言つなんよ
ではフォースの天然について話合いましょう～

翠波

「どうせ同じ理由だろ～！～」

ピンポーン！

ボルト

「作者に付いていけねー（ ）」

「ボルトで何がやりたかってんだ?」

翠波達の自己紹介

「やんな」と違つ小説でやれよー。」

良いじやん良いじやん！お前達と後輩の顔合わせだと思えーーー！

ボルト

八

ライチュウ（前書き）

今回はボルト達は関係なし

ボルト

「出番待つてたのに……」

ライチュウ

ライトが旅にでる3ヶ月前の話

「つづりまでもつこつきやがる。」

ある、ライチュウが走りながら弦く

「逃げるのもこれで終わりのようだな。」

逃げるライチュウの田の前にあるポケモンが立ちはだかった

「つづせー！」『雷』

「無駄だ！』ロックシールド』

雷は土の壁に阻まれてしまつた

「後ろを見てみろ」

ライチュウが後ろを振り返ると向田もポケモンが迫つて来ていた
「お前はここで朽ち果てる

「俺は負けねー！」『雷爪』ソロー・インダラ』

ライチュウの手から電気放出され、長い弓のよつとなっていた

「ならば『炎剣サラスペンダー』

電気と炎がぶつからあつ

「『雷砲・拡散』」

筋状の雷が周りをなぎはらい一掃する

「『まもる』そして、マルマイン部隊、大爆発！」

ライチュウの周囲に集まつた数十ものマルマインが一斉に大爆発をした

その爆発は数百キロ離れた町からでも確認されたらしい

ライチュウ（後書き）

今回のライチュウはキー・キャラクターです！覚えておいて下せー！

戦ご「前編」（前書き）

ボルト

「なあ、瀬波達の小説はどうしたんだよー。」

『氣にするなー！

ボルト

「氣にかかるよー。」

では

(<O>) ヘビリテー

戦い【前編】

今回も謎のライチュウバージョン

ボルト

「もしや遂にネタ切れか?」

ツギク（。 。）ノ

ボルト

「そうだったのか……」

ソウ

「呼びました?」

名前がギャグだな…今、気がついた…

爆発に巻き込まれたライチュウビッグなったんじょつかね~

「うう……」

ライチュウが田を覚まし辺りを見回した、しかしどこを見ても辺り
は闇

「此処はどこなんだ!」

闇の奥から、声が聞こえてきた

「田が覚めたようだな…此処はお前が今まで生きていた世界とは、

全く違ひ

「じゃあ、どじだー」

「お前がこの世界にくる直前の事を良く考えてみる」

「この世界にくる前は……つは……も、もしかして俺は死んじまつたのか?ここは眞界なのか?」

「まあやう言ひ事になるな、生まれ変わり元の世界に戻るか?」

「ああやうすい、」

「しかしだ、生まれ変わると今までの記憶はすべて無くなる」

「待て!…俺には元の世界に弟達と妹、そして親父とお袋が居るんだ!奴らから逃げる事になつてから顔も見せてねえんだ!絶対に生まれ変わると云ひのなら俺は今まで通り逃げてやる!」

「逃げたとしても此処は私の世界だぞ!」にしても見つけられる

「だったら此処でお前を潰して逃げてやるよー」

「笑われるな、私は一応神だ神に勝てる訳が無かる!」

「神だらうが、なんだつてどきときやがれ!すべて潰してやるよー」

戦い【前編】（後書き）

ネタ切れになつたので、自分のポケモンについて次回からかいていきます！

ボルト

「次回からかよ！」

冥界でのバトル（前書き）

スランプ気味だった時の作品がとんでもないなかつた（泣）
スランプから少し回復しました！これから頑張りますよ！

冥界でのバトル

今回もライチュウだよー。

「言わせて貰うがこの世界で死ぬとなにもない『無の世界』へと落ちる、それでも戦うのか？」

「もううんだー。」

ライチュウが威勢良く返事をする

「しかし、いくらなんでも差が大きいな、こんなにじや戦つても楽しくはないな」

「どうやらハンデをつける気のようだ

「じゃあ、お前と同じライチュウになり、お前とタイマン勝負といこうかな?」

「なんでも良いくからバトルしてくれよー。」

「よしーー戻ーだらう。」

そう言い終わると周りが明るくなりバトルフィールドが現れ、ライチュウの反対側にはもう一人のライチュウが立っていた
「ここは私が作り出した架空のバトルフィールドだー用意は良いかー。」

「ねー！」

そう言つとライチョウはもう一方のライチョウに向かつて突っ込んだ
で、いつた

冥界でのバトル（後書き）

自分のポケモンについて話をしますわ！

パールで一番最初に選んだポケモンはナエトルでした！

そしてそのナエトルはいま68レベルまで成長しドライテスになっています！

しかしそのドライテスは今や放置される運命になつたいるのだ！

次回もお楽しみに！

free space (縦書き)

無いんでしょ？

お久しぶりです、皆さんがた！やつぱり、いつやつて長い間書いてなかつたと言つことだから、この小説の作者はひとつもなく良い小説を書いていて作者は

『1ヶ月以上放置していい感じの内容が浮かんだぞ～イエーイ』なんて事になつてるんだろうつてお思いでしょ？

実はそうなんです！！凄い案が降りて来たんです！！……なんてなる訳無いでしょ？！

第一書がなかつた理由が一つのゲームをこの一ヶ月やりこんでいたんですから！

ボルト

「ん、なこと言つてないでやつたとかいたら（呆）」

な、何故に個々にお前みたいな下等生命体が神である私が作り出した私だけの free space だ？

第一究極さんの所でクイズ大会をやつてるんじや？

ボルト

「お前が勝手に呼び出したんだろ！！第一下等生命体つて（泣）」

あーそつだつたよ（笑）

ボルト

「いや笑つてんじやなくて早く戻せよーお前が無理やり呼び出した

から来たのが本体じゃなくて魂だけ個々にきたんだからー。（怒）

ほー、つと轟^{クラッシュ}とは究極やんの所に居る本体は蟬のヌケガラ状態

（笑）

ボルト

「だから早く戻せ！」

じゃあ皆さん、これから本格的に小説書いて行くんでーじゃあサヨ

ナラ

＝＝（・・・・・）

ボルト

「俺はどひなんだよー（泣）」

free space (後書き)

亡いんです 漢字が

ライト達の帰還（前書き）

久しぶりの更新です！

文章力が無いので誰かアドバイスをお願いします！！

ライト達の帰還

「今日も暇だな~」

ボルトに店番を（無理やり）やらされたソウがいつもの「」とくかわンターにだるそうに座っていた

ガタン！

突如、扉が開く

「俺参上ー！」

「な~んだ、ボルトさんですか、でも此処まで放置したんだから何されるか分かつてますよね~」

怪しい笑みを浮かべならソウがボルトにジリジリと歩み寄つていいく

「いや、あの、その……」

「問答無用『アルテマ』ー！」

叫び声をあげながら空に吸い込まれるように飛んでいくボルト

「そ~れ、俺等が別世界のバトル大会に参加させてもらえるんだつてさーーー！」

「だつたら早速特訓ですねーーー！」

「でも、FF呪文は使つなよーーー！」

「分かってるよー。」

そうして、全員が散らばって行つた

ライト達の帰還（後書き）

バトル大会はハーブさんのバトル大会です！

半ば飛び込み参加でしたが受け入れてもらいました！

ハーブさんに感謝です！

ライトの練習（前書き）

久しぶりの更新です！

今回は轟が手直しをしてくれたので文章が読みやすくなつてあります

ライトの練習

ライト編

バトル大会で優勝するためにライトは秘密の特訓場所に来ていた
秘密の特訓場所は巨大な岩が数百個有るだけのサッパリとした場所だ
早速、ライトは一個の岩の前に立ち、岩に向かって回し蹴りを放ち
粉々にする

「ふ～、まあウォーミングアップはこれ位かな～……！」

刹那、後ろから何かを感じたライトはサイドステップでその何かを
回避する。

そして元々ライトが立っていた所に極太のレーザーが通り過ぎた
ライトは一つの岩を指差しながら言った

「そこのお前！隠れてるのは分かってるんだ、出て来い！」

すると、一人のフライゴンが岩の影から現れた

「僕の『Z・レーザー』をよけるとは思つた通りただ者じゃ無いね
じゃあ、これほどつかな～『H・レーザー』……！」

フライゴンが口から細いレーザーを放つ

「そんなレーザーなんか『雷波斬』……」

ライトが手を振り電気の衝撃波を放ち相殺させる

「あひやーー！ ホーミングレーザーなんだからよけなきゃー…

「ふ～ん、だつたらよけたりレーザーが追つて来るのか……って、自分で技の特徴教えていいのかよ（汗）」

「えー？ つあー口がすべっちゃったよ
そうそう、自己紹介がまだだつたね～、僕はフライgonー。名前は言わない主義なんだ！」

変わった主義を持つフライgonだ……。

「俺は見ての通りピチューだ。名前はライトだーといひでお前は俺になんの用だ？」

「ああ！ それはある方に君を強くして来いって頼まれたんだ

（ある方が、どうせ糞作者の野郎だらうな……）

くしゅん！

ん？ 誰かが噂してゐな……。

「で、僕が見たかぎり、君のバトル方針はごり押しで、作成及び戦略は考えずに戦つてる。つまり補助、防御の部分が欠けてるんだ、だから……」

「だからどうするんだ?」

「だから、僕と特訓して防御の技を作りださない？」

「強くなれるなら何でもやつてあるよー。」

「よしー！ そうと決まつたら早速特訓だね！ 」

そう言うと二人は向き合つた

「じゃあ、ライトが僕が放つN・レーザーが防げるようになつたら特訓は終了、良いね?」

フライゴンがライトに尋ねる

「了解だ!! ガンガンかかって来い!!」

「いやあ行くよ！」**レバサード**！

（まずは相手の技の威力をみるとするかな）

卷之三

ライトが雷波斬を放ち、レーザーを相殺させようとする

しかし、

「何！？」

雷波斬は威力を減らすどころか簡単に飲み込まれてしまった

「何！？ぐそ！『蒼雷球【デスペラードサンダー】』！！」

ズドオオオオオン！

電気の鉄球を横に振りなんとか相殺させる

「ハアハアハアハア……思っていた以上に威力が高いな
もう一度やつてくれ。イメージが湧いた。なんとか防ぐ技を産み出
せそうだ」

ライトはレーザーを少し被弾したようだ。息があがっている。

「じゃあ、『N・レーザー』！」

（あんな威力じゃ、固い鉄板の壁を作つても突き破つちまうな、だ
つたら弾力の有る壁を作つて跳ね返してみるか……）

「つは！『電気の壁』！」
スパークウォール

ライトの手の前に現れた電気の壁はN・レーザーを受けた途端に輪
ゴムを引っ張つたように伸びる。そして、その勢いを逆に利用して
跳ね返す

「えー？」

N・レーザーに飲み込まれたフライゴンはそのまま空の彼方へと消
えて行つた

「かなり飛んだな～！ま、まあ俺の新しい技の完成でいいか？」
喜んで良いのかどうかわからない状況に置いていかれたライトであつた

ライトの練習（後書き）

新技サンダーウォールについて

技としてはカウンターやなどと同じ
しかし、サンダーウォールに敵が触れた途端相手に高圧の電流が流れ
れる

サンダーウォールは避雷針の効果を受けない、地面タイプにも効く
と言つ特徴がある

ライト

「反則じゃね？これ（汗）」

大丈夫！お前自身が反則だから！

ライト

「そう言ひ問題か？」

まあ轟！お前は『良いセンスだ』

＝＝（・・・）

ソウの……（前書き）

ソウ

「バトル大会？に早く出たいな～」

ライト

「早くバトルしたいぜ！！」

俺は会場が壊れないかが心配だ……

ソウの……

ソウ編

ソウ

「作者さん?」

ん?

ソウ

「今回のバトル大会って、FF呪文禁止なんだよね?」

いや、それ当たり前だから（汗）

ソウ

「作者さんはバトル大会で僕が負けても良いの!!!」

嫌、負けても良いのって言われても……

ソウ

「負けても良いのかな~（笑）」 怪しい笑みを浮かべながら作者に近づく

で、でもFF呪文は無しなのは変わらないからね？でもFF呪文の代わりに新しい技覚えさせてあげるから、それ以上近づかないで（汗）

ソウ

「それだけ言うんだから……」

はいいい！！新技作ります、作ります！！

ソウ

「希望はFFの技みたいなのかな、それに馴れてるし」

じゃあ、召還獣という方針で

地面に魔法陣を作り（一瞬で）そこからポケモンを出す

勿論、普通のポケモンじゃありません

魔法陣には水、草、炎、電気、岩、地面、氷、鋼のタイプがあり
水なら、水で出来たシャワーズ
草なら、草で出来たジュプトル
炎なら、炎で出来たリザードン
電気なら、電気で出来たライチュウ
岩なら、岩で出来たサイホーン
地面なら、土で出来たビブルーバ
氷なら、氷で出来たトドグラー
鋼なら、鉄で出来たコドラ
を召還する事ができる

又、出した召還獣を吸収する事でそのタイプのブイズに進化する事ができる

相手に例えればバシャーモがいたとした場合、リザードンの代わりに
バシャーモを召還する事が出来る

簡単に言えば相手のポケモンの召還獣を出せると云つ事

そりに、召還獸に自分から入る事が出来る入った召還獸はソウ君の
思いどおりに動かす事が出来て実体化する

弱点は

効果抜群の技を食らうと進化が解ける、

召還獸が食らった場合一発で消滅する

技は普通に使える

又、召還獸は吸收している物、入ってる物も含め一體までである

ソウ君このなのどう？

ソウ

「気に入つたからこれが新技だ！」

ソウ君の新技

召還獸【○】

○にはそのタイプが当てはまります

例

召還獸【炎】

です！！

ンウの……（後書き）

適当す「ああしたすいません」――

ソウ

「あやめのなら最初から書かなければ良いじやん」

（。 。 ）

ライト達の旅の始まり（前書き）

更新が遅れてしまいすみませんでしたm(ーー)m

ライト達の旅の始まり

「ライトは練習を終えて、ボルトの店でみんなの帰りを待っていた

「ふあー、作者も」の頃放置気味だしなんか暇だな～」

カラーン、口ロン

「うやうやう、ソウが帰つて来たよつだ

「ライトさん、なに現実的な事言つてゐんですか？まあ、その事は僕も否定しませんけどね…」

「おおー。ソウ帰つて來たのか…。やつぱりソウもやつ思ひつか？」

「うふ、作者さんの急け癖は本当に困りますから……」

などと作者としては聞き捨て難い話をライト達がしていると

ツバン！

扉が勢い良く開きグリーンが飛び込んで来た

「ライト、大変だよ！」

町でライトのお兄さんらしき人物を見た人が居たんだよ！」

「なんだって！？で、その兄貴を見たらしい奴はどうに居るんだ？」

？」

「『めん、ライト、ライチュウが謎の奴らに追われていた！…つて、
言ひ話を盗み聞きしただけだから、連れてきて居ないんだ、でもラ
イトのお兄さんらしきライチュウはこの島じゃなくて『ヤカテクト
リ』で見たらしいんだ！』

「『ヤカテクトリ』この世界の中心の島か……」

ヤカテクトリはこのライト達の世界で真ん中に位置し、大きさも他
の島に比べ格段に大きい島である
この世界を收めている機関も此処にある

「兄貴に会えるかどうかは分からねーが、行つて損することはまず
無いだろうな！…旨い物が食えたり見たことねえ奴らとバトル出来
るだろうからな！…」

「ライトらしいな～」

「ハニコ笑いながらグリーンが楽しそうに言ひ

「よつしゃー！…だつたら全員召集だ！」

いつして、その夜はライト達全員が集まり、これからどうするかの

会議を始めた

ライト達の旅の始まり（後書き）

ライト

「よ～し、皿に物食'うわ～」

ソウ

「ライトさん、さつきからそれしか行ってませんよ（汗）」

え！？ そりなんだ（汗）

グリーン

「こつになるか解らない次回をお楽しみに！」

始まらない旅（前書き）

ライト

「短い、とても短い！」

いつもの事だ！

ライト

「ハア～……」

始まらない旅

会議の為にライト達はボルトの店に集まつた

「『ヤカテクトリ』に兄貴がいるらしいと、言つ情報をグリーンが仕入れて来てくれた、しかし、みんなに言わなきゃいけない事がある……」

ライトが少し深刻そうな顔をしながら話し出した

「みんなが集まる前に『ヤカテクトリ』についての情報を少し集めてきたんだ、そしたら俺の兄貴が『God's upper people』と言つ謎の組織に追われていたことがわかつたんだ」

「ちょっとまって、追われていた? 何故、追われている、じゃないんだ?……もしや……」

ボルトが焦りの表情を見せながらライトに質問をした

「…………ああ、兄貴はもうこの世には居ないんだ……」

ライトはつむぎ、涙をこらえる
しかし、ライトは一きなり顔を上げ元気そうに言った

「だけどな、終わっちまった事だ! 気にすることあ無いさ!!
いくら悔やんでも兄貴は帰つて来ないんだ!……でも、でもなあ兄貴の、兄貴の仇だけは討つ! 相手が、どんな理由であれつとな!……」

「……」

そこまで言つとライトは大声で泣き出しちゃつた

「ちくしょう、なんで兄貴だけを、なんでなんだ！ちくしょう、ちくしょう、ちくしょうおおーー！」

『…………』

みんなはどうしたら良いかわからず黙つたままだつた

「やつと見つけたよ…

君、兄貴だけって言つたね？実は君もその対象なんだ……」

ライト達が声がしたの方向に振り向いた先には……

始まらない旅（後書き）

ライト

「変な終わり方だな……」

面倒なんだもん！

ライト

「こいつ駄目だ……」

なんか言つた？

ライト

「なにも言つてないよ～（笑）」

サブタイトル？そんな物なくても良いじゃん！（前書き）

今回のサブタイトルを見た人、このサブタイトル、物語の内容と全く関係無いので、安心を！！

ソウ

「では、どうぞ！」

サブタイトル？そんな物なくても良いじゃん！

声のした方向を振り向いたライト達は手に黒いエネルギー弾を構えた、ヨノワールであった

「君のその力が必要なんだ『シャドーボール』……」

ヨノワールがライトにむかってシャドーボールを放つ
いきなりの事であることと自分の兄が死んだ事がショックで反応が
遅れ、その場に突つ立つた状態のライトにシャドーボールが飛んで
くる

「ライト！危ない！」

ライトと突き飛ばしライトの代わりにシャドーボールを受けたボルトが壁を突き破り外に吹き飛ぶ

「お、親父！」

ボルトを追い外に飛び出すライト

「親父大丈夫か！？」

ボルトを搖さぶるがボルトは反応を示さず、動かない

「お、俺のせい……」

「ライト！ボルトさんは僕が見るから早く逃げて……」

「そうです……ライトさんヨノワールは僕に任せて逃げて下さい……」

グリーンとソウがライトに声を掛ける

「俺は、俺はこれ以上仲間を失いたくない……」

そつまうと電気の鉄球を召還する

「俺は何も出来なかつた……だから、俺はお前を……潰す……」

店から飛び出してきたヨノワールにそう告げる

「君、面白いね……氣に入つたよ『シャドーボール』……」

ヨノワールはいきなりグリーンに対してもシャドーボールを放つ
ボルトを看病していたグリーンは避ける事も出来ずにシャドーボー
ルに直撃する

「グリーン！ テメエ、許さねえ……！」

突如、ライトの鉄球の形が変わっていく

「ふふふ、やつぱりあなたでしたか『レジエント・ウェポン・リー』
は……」

鉄球は電気のドラゴン（ドラクエジョーカーのマスター・ドラゴン
みたいな形）へと形を変貌させる

「『アイアンテール』」

「『冷凍パンチ』！ グハア！」

ライトのアイアンテールを冷凍パンチで相殺させようとしたヨノワールは予想以上の衝撃を受け少し後退する

「『氣合いパンチ』……」

ヨノワールの隙を見逃さず氣合いパンチで追い討ちを掛ける

「ツグフ……」

氣合いパンチが腹に決まつたヨノワールは10m程吹っ飛ぶ
そして、ライトのドラゴンがヨノワールに向かつて高電圧の電気ブ
レスを放つ

「……これがレジュント・ウェポン・リーのちか『ズドーーーン！
！……』

激しい衝撃波で地面が揺れた

そして、煙が引くとドラゴンがブレスを放つた所が巨大なクレーター
が出来ていた

「ライト……ボルトさん、まだ息してるよ……」

どうやら対したダメージを受けていなかつたらしいグリーンがいき
なり声を上げた

「なんだって……」

ライト達はボルトに駆け寄つた……

サブタイトル？そんな物なくて良いくじゃん！（後書き）

ライア

「こつも適当に終わらせやがって」（怒）「

“めん”めん（笑）

ソウ

「それにしても作者さんの文章力つてのですよねなんかす”い読み
いくし……」

自分のキャラにダメ出しがかりされる俺つて……（泣）

謎のポケモン（前書き）

ライター

「44が始まるやーーー。」

ソウ

「始まりますよー！」

謎のポケモン

「親父大丈夫か！！」

駆けつけたライトがボルトに聞く

「ライト、ボルトさんはまだ氣を失っているかい？」

「や、そうだったのか……」

「ライト、後ろー！」

フォースが声を上げる

「つなー！」

ライトが振り向いた先には、さつき倒したはずのヨノワールがボロボロの状態で立っていた

「とつさに守るを使つたが、まさか簡単に割れてしまつなんて、しかし君の負けだ」

ヨノワールの拳が冷氣を纏い振りかざされる

「後ろががら空きだよ お・じ・ちゃん

『シャドークロー』！－！

ヨノワールが横にぶつ飛ばされる

「俺を……倒して……も意味が……な……もつむ……そこ……」

そう言つた後ヨノワールは動かなくなつた

「へつへーーーんじづ? 私のおかげで助かつたでしょ?」

耳に赤い花のアクセサリーをつけたピチューがライトに向かつて言った

「あ、桜花! なんでお前がここに?」

「ん? お母さんに頼まれてお父さんを回収しこきたの?」

(((か、回収って……)))

「でも、来てみたら危なそうだったから助けたの……」

桜花が胸を張りながらライトに話しかける

「じゃ、お父さん回収してバイバイするね~」

そう言つた後、ボルトを抱えてテレポートしき技を使つて帰つていった

「ねえ、ライト、あの桜花って誰? 話からするとライトの妹っぽいけど……」

「ああ、俺とフォースの妹だ……」

「そ、その前にライトさん、周りを見て下さーーー」

「ん？」

ライトが周りを見渡すと、いろんな種族のポケモンに囲まれていた

「街は破壊されてるみたいだし、ヤバいよね？」

「ああ、相當な……」

その直後、雷の様な金色に輝く何かがライト達の前に降り立った

「わりい、待たしたなライト、フォース！」

それは全身に雷を纏つたライチュウであった

「ライト…後ろを頼めるか?」

「勿論だ!

おいー！フォース！みんなを頼んだ！俺と「俺は『後で行く』

かの圖合で皿と皿で囲んで囲む相手を見て皿と皿で囲む

「つとー！ライトー！これを受け取りなー！」

ライトの手に投げられたのは、マチョットと呼ばれる大ぶりのナイフだった

「行くぜー！」

「任せろってんだ！」

ライチュウは日本刀の様な長めの剣を抜き放つ

「ハイドさんよー手伝つてもうつぜーーー！」

『ハアー、全く人使いの荒い奴だな』

謎の声が聞こえたあとライチュウの周りに黒いぼやつとした球体が現れるそしてライチュウは敵のど真ん中に突っ込んでいった

謎のポケモン（後書き）

桜花はこれからガンガン出て来ます！！

そして謎のライチュウ、だいたいの人は気付いてますよね？

なんか大変に…（前書き）

危ないシーンが…

ライア

「無いけどな…」「つむ…」

なんか大変に……

「つ」「ん」、しても
こんなナイフ渡されても扱いにくいつつーの……」

ライトがマチュットを上へ投げながら毒づく
その後、マチュットを逆手持ちにし構え、高速移動でジグザグに走
り回りながら、すれ違いざまに切り裂いていった

一方その頃、謎のライチュウは……

日本刀のような刀を巧みに扱いながら敵を切り裂いていた

「つとー。」

物凄いスピードで繰り出されたサワムラー回し蹴りを余裕で交わし、
そのすれ違いざまに刀を足に突き立てる当然ながら　自主規制
サワムラーはその場に倒れ込み痛さでのたうち回る、そして、そ
の場を離れようとしたライチュウにタネマシンガンが繰り出される
それをいとも簡単に刀で弾き返し、飛んできた方向にナイフを投げ
つけるナイフは綺麗にジュカインのみけ〃　自主規制　ジュカ
インはその場に倒れ込む

「ハイドさん！後は頼んだ！」

『はいよ……』

黒い球体はライチュウに姿を変え他のポケモンと戦いを始めた

カラソ、カラソ

その後、ライチュウの背後で何かが地面に落ちる音がした
ライチュウが振り向いた先にはライトが立っていた

「あ、兄貴……なんでこんな事を……本当に兄貴か?」

ライトは地面に倒れているジュカインなどを覗ながらライチュウに質問をする

「じゃあ、ライトはわたくしのナイフでどうしたんだ?」

「俺は全員、峰打ちだ……わたくしのエノワールにしても、軽い脳震
盪で倒れているだけだ……」

「そりゃ、ライト……俺はお前の兄ちゃんなんだ、正真正銘のな
後、俺がこんな事やつていいのは、せらなきややられるからだ
あいつ等は俺等を殺す氣で來てる、手を抜くと本当に殺される、そ
れに俺はもう、一回死んでるからな……」

「やっぱり、兄貴は一回死んだんだな……

わかったよ、兄貴
でも、自分が殺すなんて事は……」

「考えられない、だよな……

俺も最初そうだった、だからあいつ等から逃げていたんだ、一回死
んだ後になつて……

「ア、俺って、惨めだよな……なんか、自分に笑えてくるよ……」

「そりゃ、兄貴、変わったな……」

そう言い残すとライトはその場から立ち去った

その時

ライチュウの体が後ろへ吹っ飛んだ

「兄貴！」

ライトが見た先には、空間を司るポケモン、パルキアが宙に立っていた

「ラ、ライト！逃げるんだ！」

ライチュウは血まみれで倒れている

ライトはパルキアを見つめ呟いた

「兄貴、変わっちゃった、けどまだ借りを返してなかつたな、今度は俺が守る……」

そつと地面を蹴り飛ばし宙へ繰り出した

「行くぜ！－』蒼雷球【トスペラードサンダー】『変換・→鳥＜』

「

雷球を鳥の形に変形させその上に乗り空へ舞い上がる

「パルキア！テメエの命もこれまでだ！」

『雷・神・槍・』－！－

そのまま、鳥を槍の形に変えパルキアの頭上から一気に下降し貫いた

パルキアが地面へ崩れ落ちる

「ふう、終わったか……」

その直後、パルキアの体が動きだす

「ま、まだ、倒れていないだとー?」

ライトは雷球を構え体勢を整える

「さて、お前に危害は加えたりせん」

パルキアの言葉を聞き、ライトは雷球を消滅させる

「どうやら、お前さん達を傷つけてしまったようだな、すまない、
しかしその事が記憶に無いのだ……

久しぶりに亜空間から出たら捕まり、変な機械を取り付けられたの
は覚えてあるのだが、操られてしまったようだ……

神としてあるまじき失態許してくれ
私もお主等に協力もしてやる
どうかこの通りだ!!」

パルキアが土下座を始めてしまった為、速攻で中断させるライト

「と、言ひことは許してくれるのか!!感謝する!では、又、会お
う!」

呼び出したい時はパルキア、カモン!!なり何なり好きなときに言

つてくれれば直ぐに駆けつけたが！』

そう言いパルキアは亞空間へと帰つていった

なんか大変に…（後書き）

簡単にレジュント・ウェポン・リイの説明

レジュント・ウェポン・リイは自分の口から喰出来る武器を好きな形に変化させる事が出来る

その力は神のポケモンの力に匹敵、又は越すとも言われている
ライトはまだ力を使いこなせておらず自分の大切なものを守りたい
気持ちが強くなつた時にしか発動出来ない

次回を

ライト

「お楽しみに！？」

ひつも神様（前書き）

なんか全く小説の続きを浮かばねえ（ - - - - - ）

「な、何だつたんだ……あのが伝説のポケモンなのか……
それとも、頭の打ち所が悪くて……
つと、『高速移動』」

ライトは何故か高速移動でその場から動く
その直後、ライトが元々立っていた場所に巨大なエネルギー弾が飛
んで来た

「つたぐ、伝説のポケモンとやらは全員捕まっちゃったのかよ……」

ライトがそう言いながら見ていく方向には、なんとレックウザが浮
かんでいたのだ

「ほんと、めんどくせえー発で決めてやるぜーーー！
『神槍グングニグル』！ーー！」

決して外れる事が無い神槍をライトがレックウザに向かって投げる
神槍は一直線にレックウザに突き刺さった

グリーン一行（前書き）

更新遅れました、すみません（――）、それでは……

「どうぞ」
アート

グリーン一行

ライアがなんぢゅり、かんぢゅり、やつてゐる頃、グリーン達は……

「ライトは、無理ばかりするんだから……」

グリーンが走りながら文句を言つ

「まあ、そう言わないで下さイグリーンさん、みんなの事を思つての事ですよ、それに今回の敵は格が違います、一瞬でも気を抜いたら肉片になりかねません、相手はどうやらこちらを殺す氣で来ているようなので『召還獣【炎】』『炎』憑依『火炎放射!..』」

召還獣を自分に纏いスターに進化し襲いかかつてきたストライクに激しい豪火を浴びせ、吹き飛ばす

「俺に勝とうなんて百億年はえんだよ『雷』！」

フォースは上空から串刺しにして突っ込んでいたオーデリルに雷を落とし地面に墜落させる

ソウ達が軽くあしらつているようだが、今までバトル大会で戦つてきたような奴らがここにいた場合、即死レベルのポケモンばかりである

「グリーンさん、フォース！ 見て下さい！ あそこで襲われる人がいます！！」

ソウが示す先には、リングマから必死で逃げているポケモンがいた

「危ない！』にほん晴れ』『ソーラービーム・瞬』

にほん晴れを使い、激しい日差しにした後、超高速のソーラービームをリングマの腹に当てリングマを後方に吹き飛ばす

「大丈夫？」

グリーンが尋ねると襲われていたポケモンはこくりと頷く

「よし、リングマはぼくに任せで、ソウとフォースはこの手を守つて！」

「わかりました！」

「よっしゃあ！ やつてやあうじやねえか！」

グリーンはリングマ、ソウ、フォースは周りから襲いかかってくるポケモン達と対峙する

「口口す、口口す、ウガあアアあア！ 『ハカイロウせん』！」

リングマは破壊光線をグリーンに向けて放とうとする

しかし、グリーンが先に放ったソーラービームを受け中断してしまつ

「ウガアアアアア！ オまエ、ジャまー 口口す！」

しかし、リングマはその場から動けなくなっていた
なんと、リングマは体中が太い根っこに巻きつかれてのだ

「さつきのソーラービームは宿り木の種入りだったのです……しかし、ぼく自慢の生命力を受けた特別なね！」

リングマは宿り木に体力を奪われ地面に倒れた

「さあ、ソウ達の援護に行かなきや……」

グリーン一行（後書き）

バトルになつて、フォースのキャラ豹変……
次回はソウ達の戦いです！

ソウ

「お楽しみに！……」

サブタイは無いー。(前書き)

ひどいサブタイですね、すこませんなーーーーー

サブタイは無い！

「小ちい子を集団でイジメるのは駄目だよ～」

「やうやく、1対1はケンカでも1対複数はイジメですから」

「……」

相手のポケモン達は黙り込む

「……ヤレ」

相手のポケモンの内一体が命令を出すと、周囲にいた全てのポケモン達がフォース達に飛びかかつて来る

「相手は約百、半分半分で五十……フォースいける？」

「よつしゃ、任せとけ！～」

フォース（バトル時によりキャラ変中）はそつと云うが早いが電気の双剣を合わせて大剣にして、敵に突っ込んでいった

「アイツもコソかいノボスガヒツコウとシテいるチからをモッているゾ！～……カカレ！～！」

「ちよつと待ちなよ、君たちの相手は僕だよ～……いでよ！～『召喚獸・炎』！～」

ソウガリザードンを作り出しリザードンを敵に突っ込ませる

「『リーフブレード』」

敵のジュプトルが、リザードンにリーフブレードを繰り出し、バラにするが、直ぐに集まり、復活する

「リザードン『火炎放射』！…そして、『ストーム』！…

リザードンが火炎放射を放ち、敵を一ヶ所に集める、そして、ソウが放った、炎、水、草を纏った竜巻が敵を直撃する煙が収まるときソウが相手をしていた、敵は全て倒れていた

「ソウ、こつちは終わったよ」

「うん僕も終わりました」

「ソウ、フォース無事だった？」

二人が敵を一掃した所でグリーンがやつて來た

「うん、無傷だよ」

そう会話をした後、襲われていたポケモンに話かける

「ねえ、大丈夫だった？」

「う、うん……それで、お兄ちゃん達は誰？」

「僕はソウ、見てのとおり色違いのイーブイ、そしてあのフシギダネがグリーンで、ピチューがフォース、君は？」

「僕は、ツタージャのガイア……」

「ガイア君よろしく！」

「あの、僕、女です……」

グリーンの握手をしようとしたツルがぴたりと動きが止まる

「…………え？ええええ！」

「「めん、「めん、僕とか言つてたから、男の子かとおもちゃつた
よ～」

それから少しして、4人は打ち解けて笑いながら話ていた

サブタイは無い！（後書き）

次話をお楽しみに！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2423j/>

ライトの旅～気球に乗って～

2011年5月2日20時34分発行